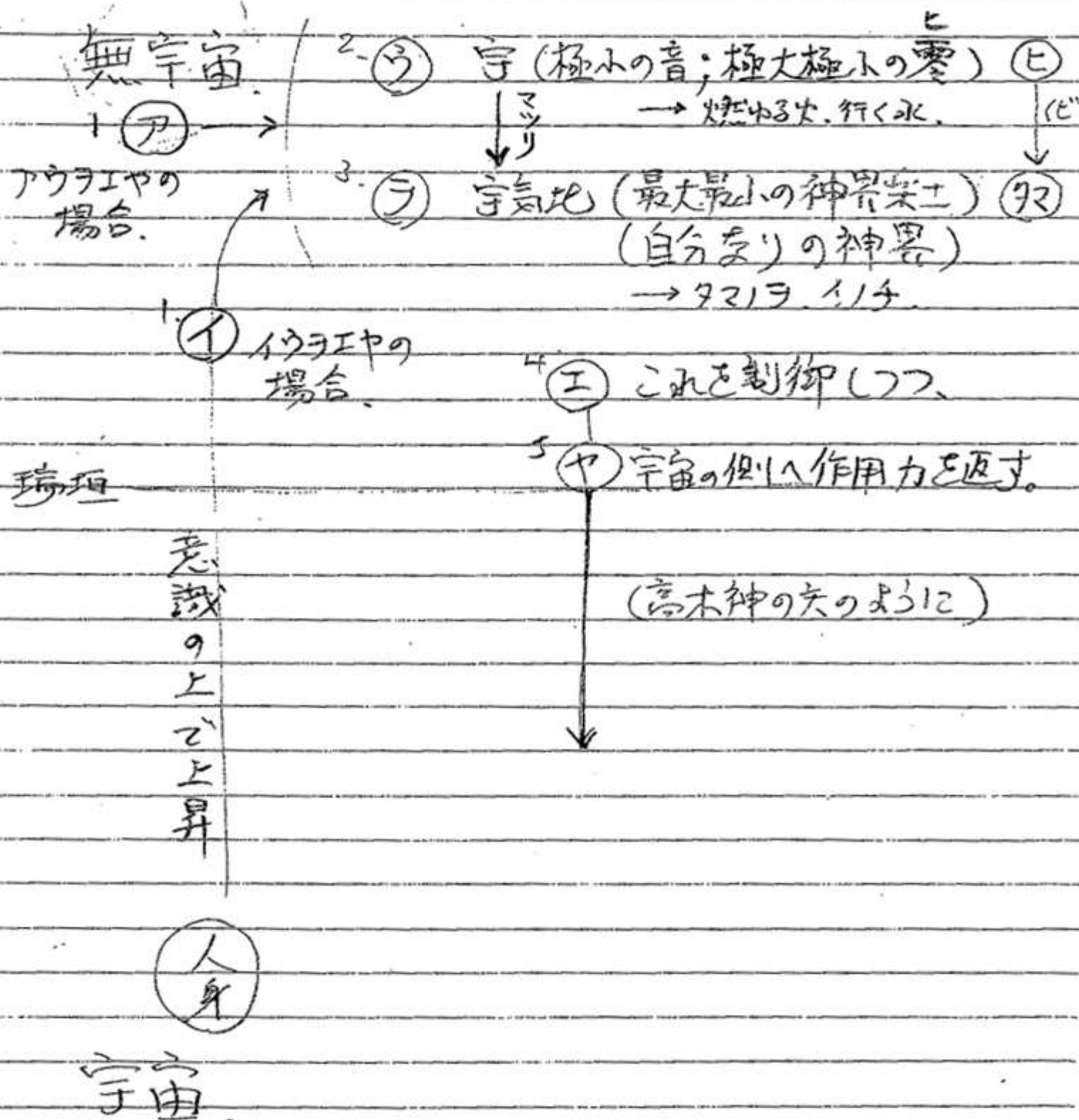


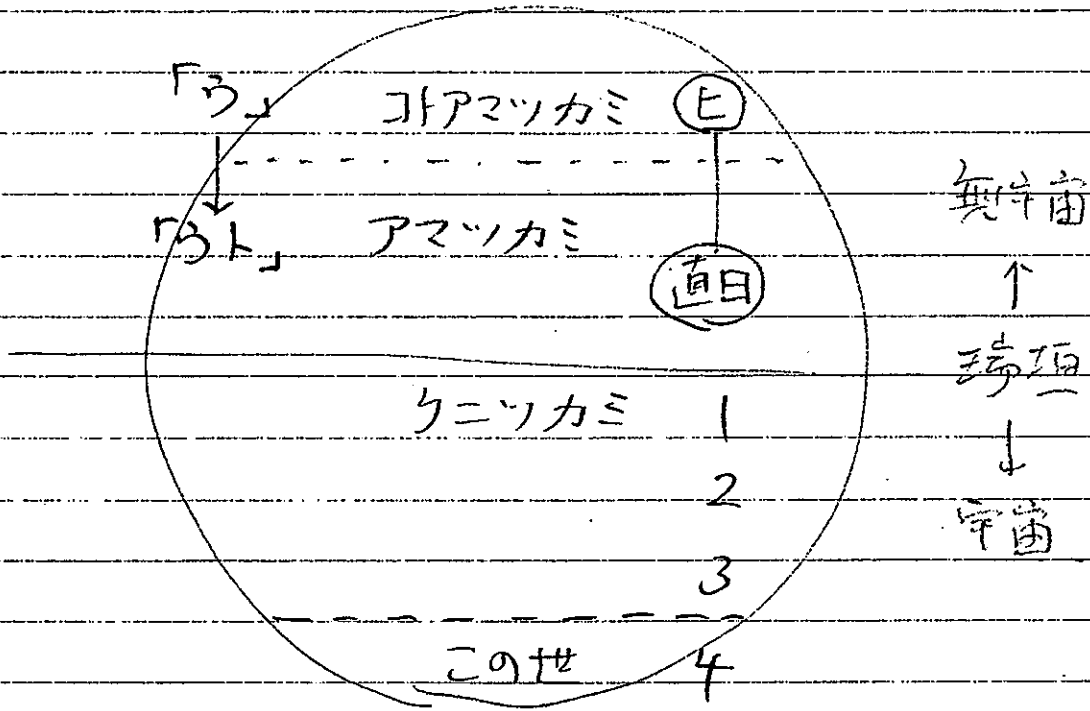
イウヲエヤ と アウヲエヤ の区別



1 寂 う.う.う.う.う.ト.ト.う。

2 寂 う.う.う.う.う.ト.ト.う.ト。

方向性. 最終的な到達点。



① 全て「ヒ」にまで戻して寂ってしまう。

② 直日を神界へ送る。

2018.11.27 (火)

ユダヤ教では、造物主(超越神)の名を

YHWH (ヨド・ヘー・ヴァウ・ヘー) と伝えている。

母音を補って読むのだが、正しい読み方が 早い時期に

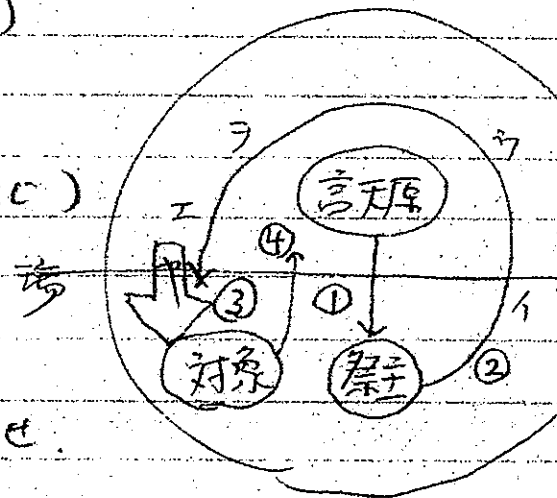
ユダヤ人自身にも解らなくなっていました。

現代では諸説あり、以下のとおり。

i) YaHVeH ヤーヴェ (H字は長音符とすることがある)
(ヤアベ も同じか?)

ii) YeHoVaH イェホヴァー
(エホバ もこれと同じ)

iii) YaHaVeH ヤハヴェー



未来90頁 ① まず14字で高天原を現ませ。

② イウラエヤで、その境地に昇って、宇宙の側へ作用力を
及ぼす立場となる。

③ その「ヤ」を説明して、「ヤアベ」と言う。

④ 宇宙での力を及ぼした対象を またこちらへと昇らせる。

昭和十九年六月二十五日 滿洲國奉天省熊岳城禊所に在りて此の解説を了る。

豫母都志許賣の神事成り成る時、天窟戸は開け關けて、八百萬神は、相互に手を拍ち、慶祝して云はく、

「あはれ・あなおもしろ・あなたのし・あなさやけ・おけ」

と。

日本古典多しと雖、古語拾遺ひとり此の祕言を傳へたのみである。

太玉フトタマの太幣帛フトミテクラを捧げまつりて、天宇受賣アソノウズメの祕神挂ヒメカミカカリと成り、八百萬神ヨロゾノカミは、日神ヒノカミの御田ミタの身魂ミタマであることを實證得サトリるのである。

あなうれし・みたのみひかり・さしとほり・あめのうずめが・むなちもも・ちよろづみたま・なりなり
て・ひふみよいむと・うけふねを・ふみとどろこし・あめつちに・きゆらかすやぞ・あめつちに・さから
かすやぞ・あちめ・あちめ・いうをえやあと・うけふみたりや・あちめ・あちめ・ああひ・ああが・ああ
ひがてんじん・ああひがてんじんゆうあいこう。

よしありと、ひとこそみらめ、みづうみの、ゆふべをぐらく、ふえのひびくを。

以上

言靈の幸

第二篇 豫母都志許賣 完

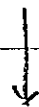
無宇宙の(神) ^{かんたら}神習ふ → 宇宙の(人) (元型) (実際)

神 天照大御神 根本趣旨曰

神
国
の
築
成
(アマノイハヤにこもっており、
高天原葦原中国ことごとくに暗し)

アノウズメの舞い踊り

神国の築成に努めるコトヲマ



神
国
の
完
成
アマノイハヤが開けて
世界が明るくなる。
あはれ、あなまもこへ

ナホヒの統率力が発揮され
全身にゆきわたる。

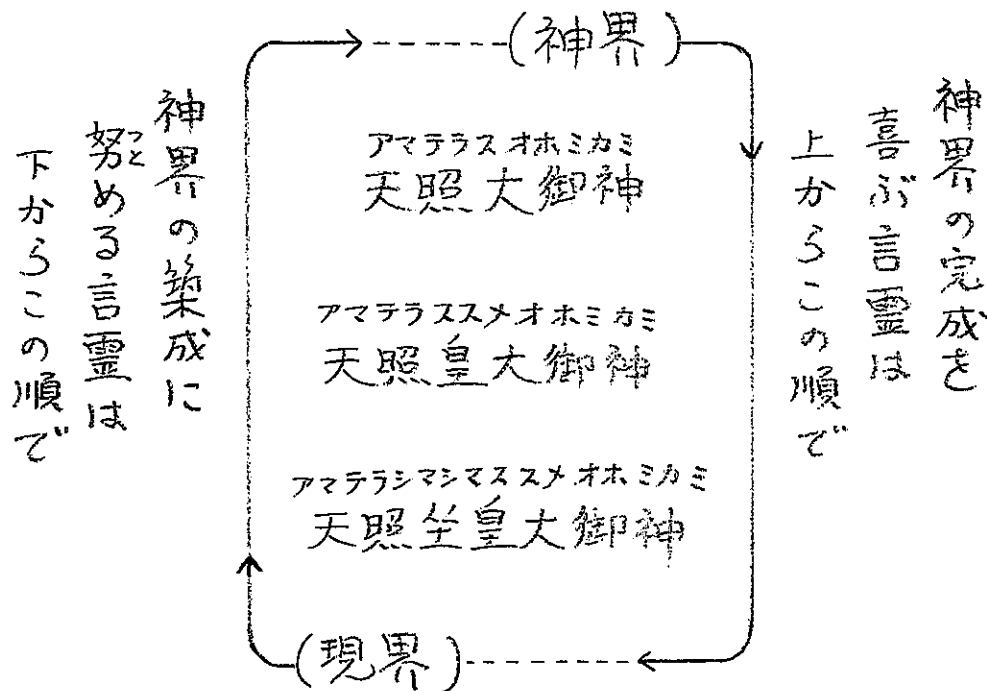
神国の完成を喜びコトヲマ



(外
郭
(ヤホヨロツカミ
八百萬神
日神の身魂
ヒカミ ミマテ))

マガツビノムシ
肉伴身など
(→神となりたるマガツビ)

二種類の言霊の区別とそのイメージ

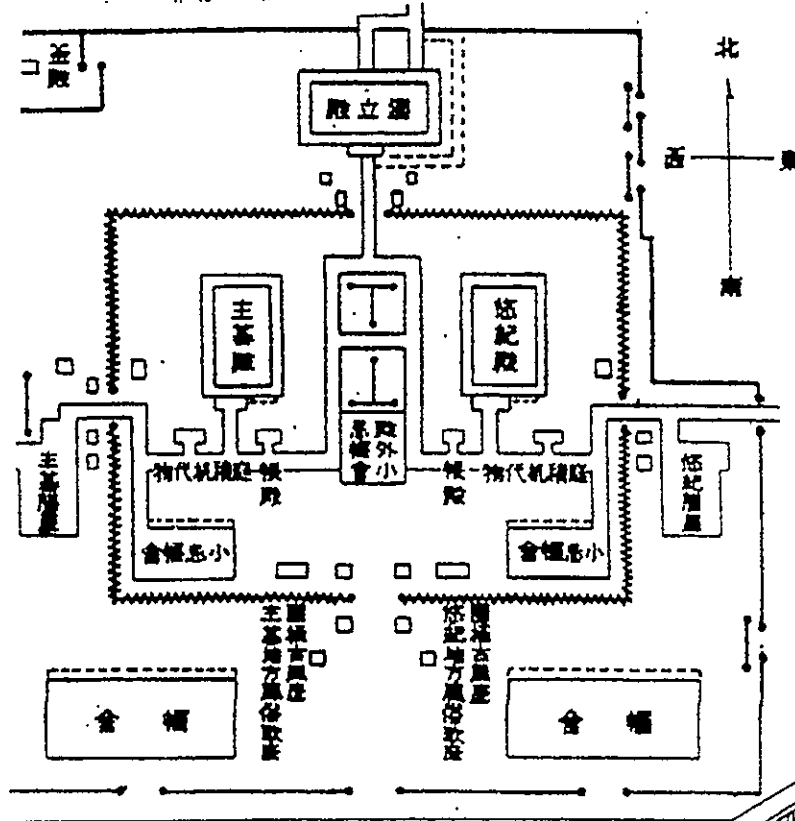


一、神界の築成に努める言霊 → 禊行事の中で用いる。

1. アアヒガテンジンユウアイコウ (十四字秘言)
2. ヒフミヨイムサヤココノタリヤモモチナミテリ
3. 天照坐皇大御神、天照皇大御神、天照大御神 (上述)

二、神界の完成を喜ぶ言霊 → 各別の行事の中で用いる。

1. アハレアサオモシロアナタノシアナサヤケオケ
(オホヒルメムチノミコトの神言霊)
2. アスパカスヤヅサカラカスヤヅオオオオオオオオ
3. 天照大御神、天照皇大御神、天照坐皇大御神 (上述)

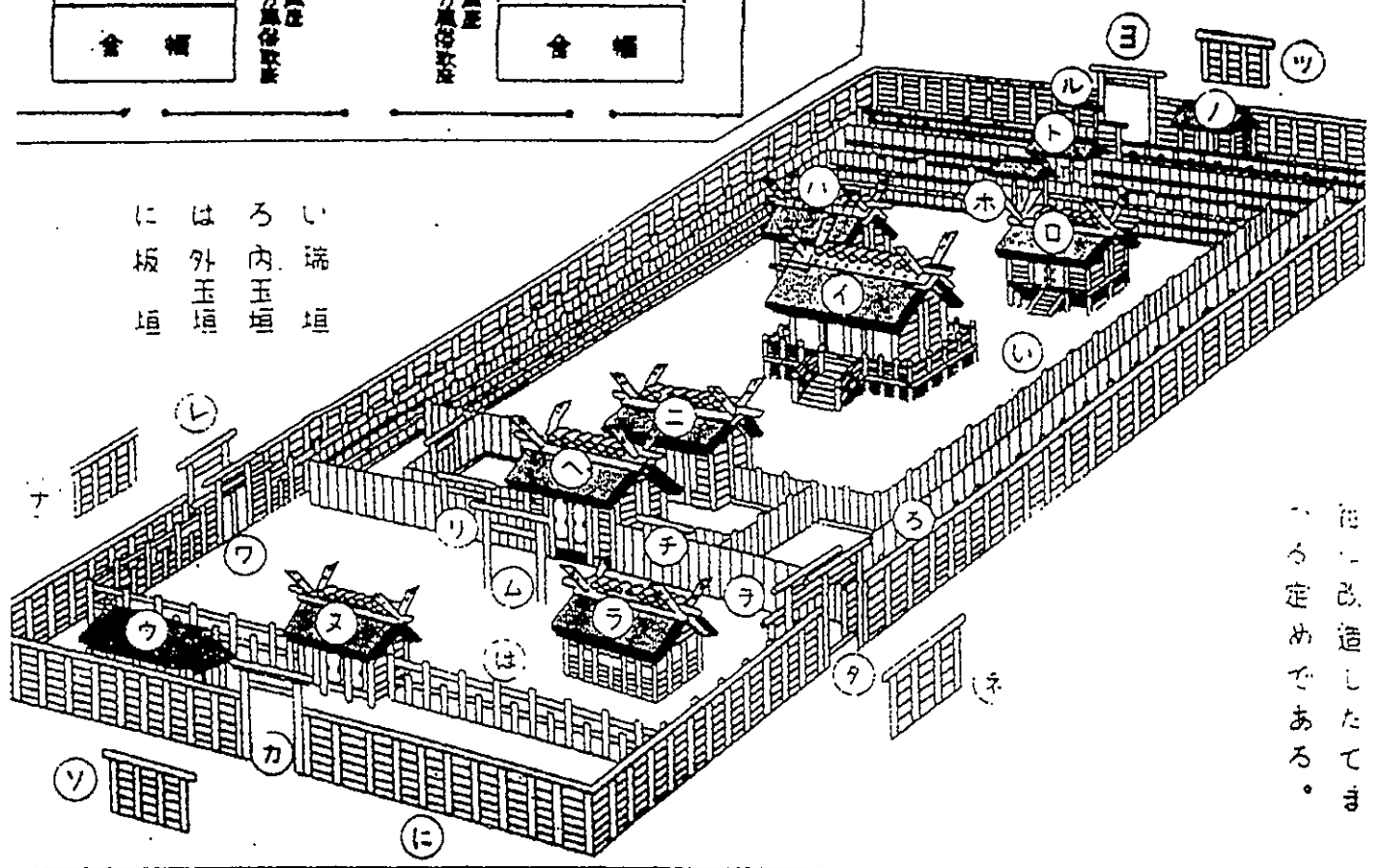


大嘗宮の正面と平面圖

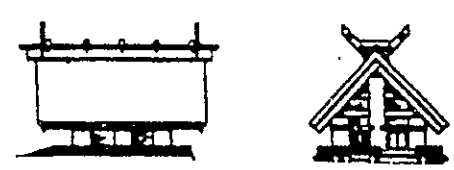
イ 正 殿
ロ 東 賣 殿
ハ 西 賣 殿
ニ 瑞 壇 南 御 門
ホ 瑞 壇 北 御 門
ヘ 内 玉 壇 南 御 門
ト 内 玉 壇 北 御 門
チ 東 棧 御 門
リ 西 棧 御 門
ヌ 外 玉 壇 南 御 門
ル 外 玉 壇 北 御 門
ヲ 外 玉 壇 東 御 門

カ 板 道 南 御 門
ヨ 板 道 北 御 門
タ 板 道 東 御 門
レ 板 道 西 御 門
ソ 南 門
ツ 北 門
ネ 東 門
ナ 西 門
ラ 四 文 門
ム 中 門
ウ 南 門
ノ 北 門

い 端 垣
ろ 内 玉 垣
は 外 玉 垣
に 板 垣



従一改造したてま
へる定めである。



息は「生き」であつて、息を離れて我々の生存はなく、生存は息であることは誰しも承知のことながら、我々は息の重大性をともすれば忘れがちで、これに工夫を凝らすことなど一般に無関心であると云えます。

然るに、日本古典の代表たる「古事記」を見ても、「日本書紀」を開いても、息の記録があ

り、現に伊勢の内宮・外宮にはそれぞれ息の神様として、級長彦彦神（しなつひこのかみ）と級長戸辺神（しなとべのかみ）が陰陽吐納の象徴として、風日祈宮に祭祀されています。

神 命

人の身は何れより来たり何れに往くか。

人は人の生活を見て其の生活の資料と人との關係を忘れがちである。

為に生れ来りて其の生れ来りし理由を忘れ死に往きて其の往くところを辯ぜぬのである。

然らば人の生活資料とは何であるか。

人の生活に必要な資料は見るかぎり聞くかぎりのみならず、見得ず聞き得ずとも在るかぎりの物その物である。

相互に造りつつ造られつつ、養ひつつ養はれつつあるのである。何故かと云ふに在るかぎりは實在で存在である。

實在で存在であるとは一塵一埃と雖、在るかぎりの外なるものの無く、外なること能はず、外なることを許されぬとの義で、正邪曲直善惡美醜の隔て無く、

此の物で此の通りであるのである。

山も

河も

草も

木も

何時から出来て

何時から生へて

何時かは缺けて

何時かは枯れて

又造られて

又生れ来て

何時となく

何時と定めず

草も木も山も河も。

玉の緒を結び結びて人皆は

伊着くなるなる天安河。

以上 昭和十三年五月一日筆録

大正人道教主人と云ふのは萬有を構成する原因である。

故に支那人は神と稱し、印度人は閻魔天と畏れ、猶太人は恵保婆と呼びて共に其の徳を讃仰しつつあるので、日本人は伊邪那岐命伊邪那美命二柱神と傳承

したのである。

之れが人の命を主り運命を定め給ふのであるから、生老病死を知らんと思はば伊邪那岐命伊邪那美命二柱神にうかがひまつべきである。

又此神を二柱祖神とも天祖とも稱へまつりて天照大御神にたましますなり。

天照大御神が天祖にたましますことは天祖神社と稱する神社の祭神が天照大御神にて知る

其の二柱と稱ふるは天照坐皇大御神にてたましますからなので神皇産靈御祖神と稱へて修理固成の月神にたましますなれば一圓相にして光明遍照十方世界無際無涯無邊無盡無始無終無碍光如来なる一音響にして妙音天鼓妙吉祥佛と稱へまつると等しき御名である。

以上 昭和十三年五月八日

陰曆四月九日

佛誕会翌日祭識之

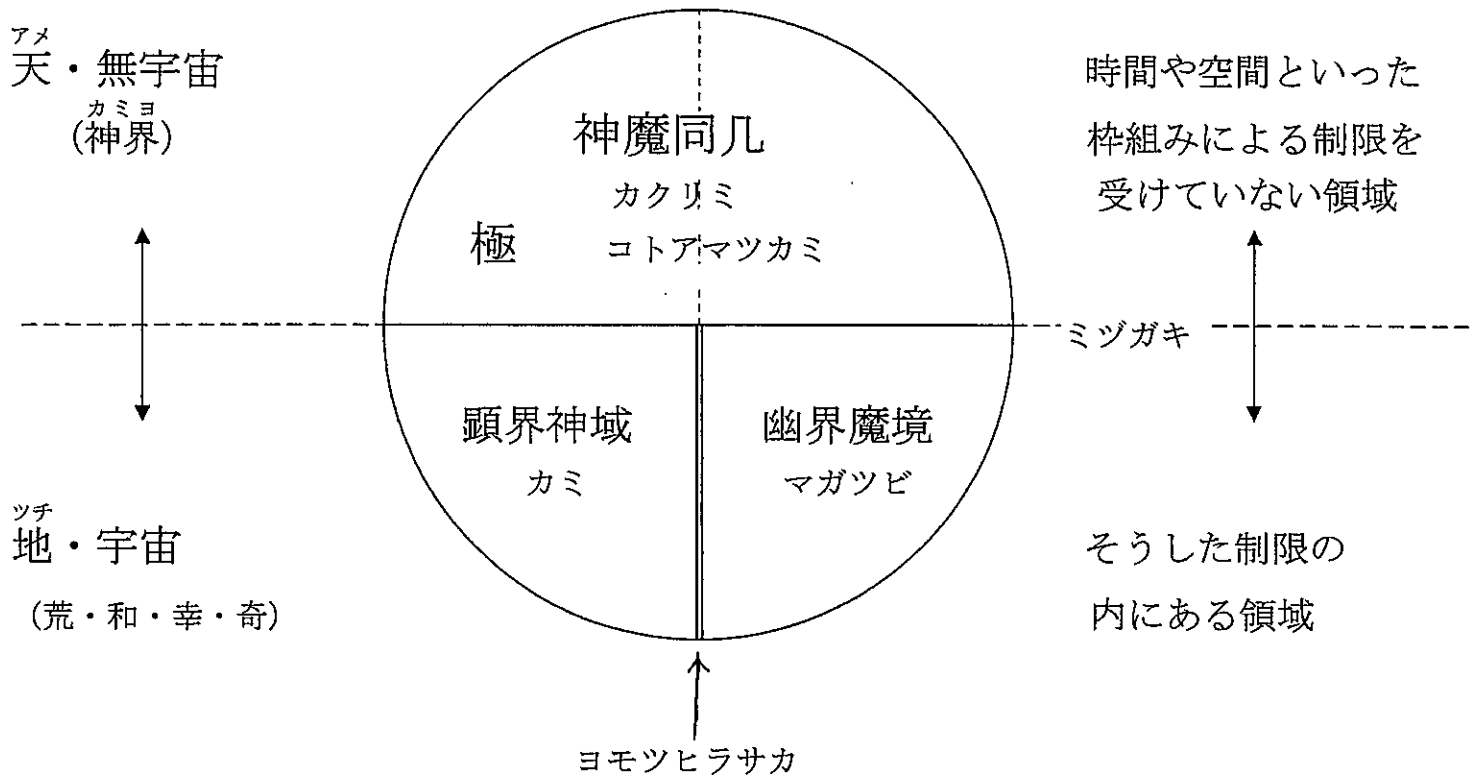
(万有を構成する原因)

人もまた、さまざまな要素から構成された実体であり、それらの要素が結んだり離れたりすることで、生病老死が生ずる。故に、生病老死について正しく知ろうとするならば、その「構成原因」となっているイザナギイザナミに、うかがいまつるべきなのである。

二柱神は、実体としては天祖（天照大御神）であり、修理固成を司る^{ヒノカミ}日神（神産巢日御祖命）であり、作用力としては、天照坐皇大御神である。

アマツチ 天地概略図

アメとツチを合せて、大宇宙と称する



この二項対立の図式は^{ツチ}地の側でのみ有効

^{アメ}天の側には及ばない

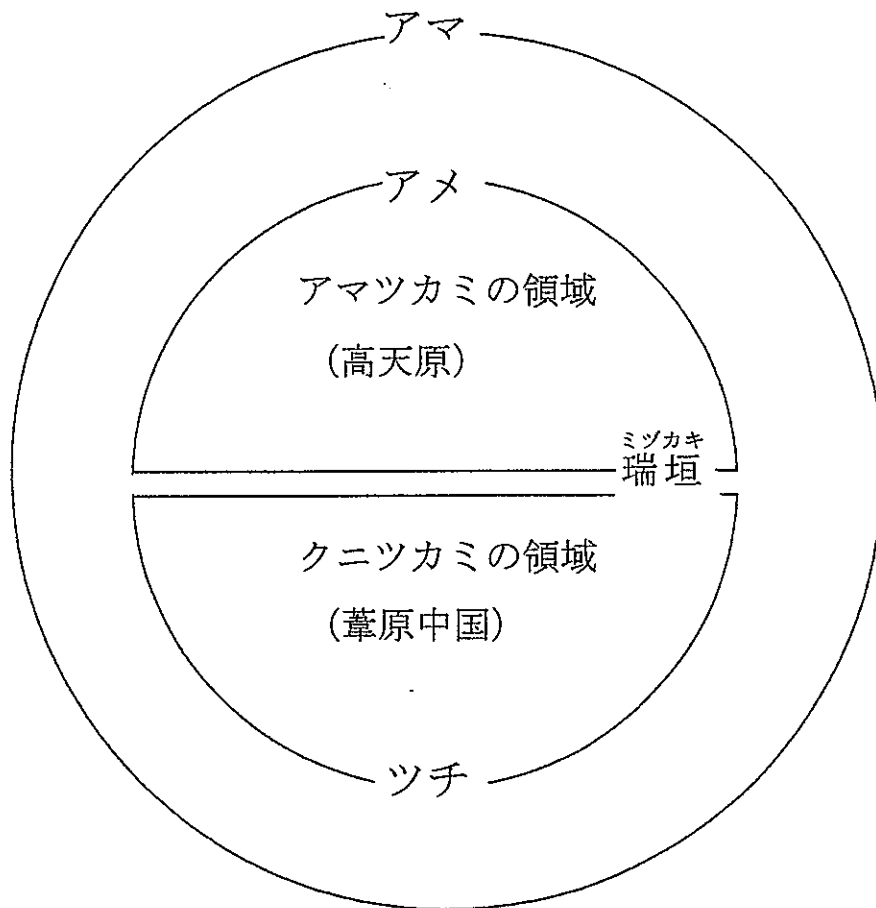
^{アメ}天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域

^{アメ}天とは、物理的に言えば、宇宙創世以前の領域

天地概略図 第二版 (あくまでも概略)

コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	アマノイハヤ (天石屋)	} 全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



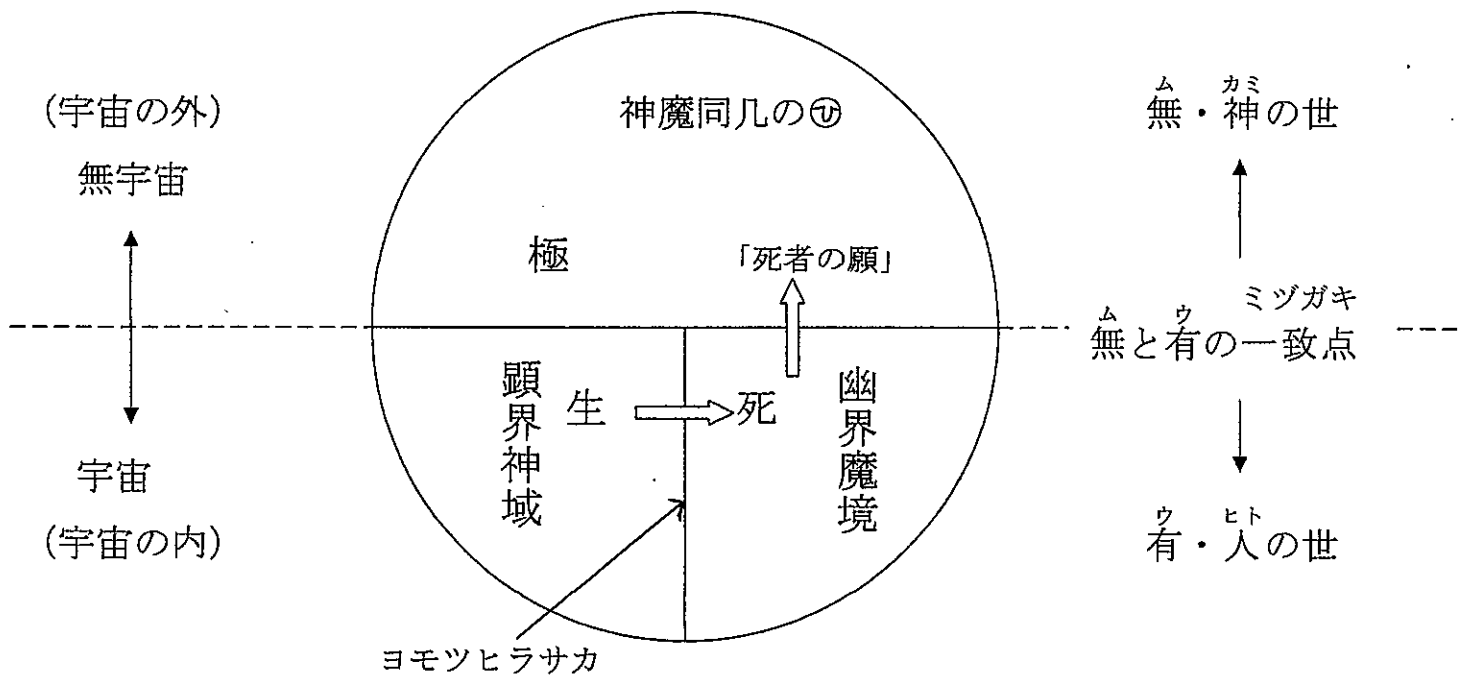
○「高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の中津国^{ナカツクニ}) と幽界魔境 (マガツビの領域、黄泉国^{ヨモツクニ}) とに分かれている。

(第一版を参照)

死者の願ひ

「㊦の教へより」



1 頁下段 「人間的身心の明らめ難き〇」とは、

『無宇宙の零は、人間の身では明瞭に認識することが極めて困難である』
という意味。

仮に〇と表現しているが、この同じ実体を、「種子」としては㊦と描き、
「その㊦のままに築かれた筒体」を⊕と表現する。

2 頁上段 「無と有の一致点」

上の図では、宇宙と無宇宙とを合わせて一個の円で表現してしまっている
ので、図象としては「一致点」ではなく、「境界線」になってしまっている
が、これは単なる表現上の問題であって、何ら本質的な差異ではない。

神業としての

オホミマノハラへ ↑

↓ 人間のミソギ行事

(オホミマノハラへの主体としての神名) イザナギノオホミカミ	
(稷) イザナギノカミ (アマツカミとして)	(葎) イザナミノカミ (アマツカミとして)

同 || 義

(ミソギ行事の主神としての神名) オホハラヘドノオホミカミ	
契 (神のミイツと 無宇宙から人間身へ)	葎 (罪とケガレを 人間身から無宇宙へ)
1. 主神 イザナギノカミ (アマツカミとして) ↓ (中略) 7. 分掌神 ソコツツラノミコト 9. " オカツツラノミコト 11. " ウハツツラノミコト (アマツカミで、ガツウニツカミ)	14. 主神 イザナミノミコト (アマツカミで、ガツウニツカミ) ↑ (中略) 16. 分掌神 セオツツヒメノカミ (2次下、別名) (ウニツカミとして)

人間身

人間身としての ミソギ行事における大坂戸大御神 21柱.

	ミソギ 禊	オモテ (顕業)	ハラヘ 禊	ウラ (幽事)
主神	1	イザナギノカミ 伊邪那岐神	14	イザナミノミコト 伊邪那美命
司神	2	アマテラスオホミカミ 天照大御神	15	タケハヤスウナノミコト 建速須佐之男命
分掌神	3	神直毘神	16	セオリツヒメノカミ 瀬織津比咩神
	4	大直毘神		
	5	伊豆能賣神	17	ハヤアキツヒメノカミ 速開都比咩神
	6	底津綿津見神	18	イブキドヌシノカミ 気吹戸主神
	7	底筒之男命	19	ハヤサスラヒメノカミ 速佐須良比咩神
	8	中津		
	9	中筒		
	10	上津		
	11	上筒		
応化神	12	オホマガツヒノカミ 大碓津日神	20	ハヤタマノヲノカミ 速玉之男神
	13	ヤソマガツヒノカミ 八十碓津日神	21	ヨモツコサカノヲノカミ 泉津事解之男神

↓ 絶大無限にして、
 其の圓滿は是の統一体にてあり、
 其の義

カミにてあり、
 大宇大宙
 連落梁柱
 無限

ミ ↓ 充滿実容

其の内に実容あり

（大宇宙の
 堅固の地なる面）

圓里の土なる面

↓ 頭幽の意、
 明暗

カ ↓ 晃耀赫灼

開き割く

（大宇宙の
 照り照ける面）

身と魂
 御魂

三産魂

生魂
 足魂
 玉留魂

シ ↓ ミタマ

ミムスヒ
 三産霊

イナムスヒ
 生産霊
 タマムスヒ
 足産霊
 玉留産霊

ホ ↓ 火明

固く強く生々發展と止まるもの

ミ
 木 ↓
 実と魂の
 御魂

オ ↓ 伸心に展びて

際限なく拡がる

オホ

↓ 伸びる性質を有する
 大

生死遷流
 出入往還

無限

大宇宙

オ
ホ
ミ
カ
ミ

① アマノミナカヌシノオホミカミ

中心
→ アメノミナカヌシノカミ

(他6柱) コトアマツカミ

コトアマツカミノオホセ

② イザナギノオホミカミ (十柱)

無宇宙では

イザナギノカミ、イザナミノカミ

↓

宇宙では

イザナギノミコト、イザナミノミコト

(国生み、神生み)

「この漂える国を修理、固め成せ」

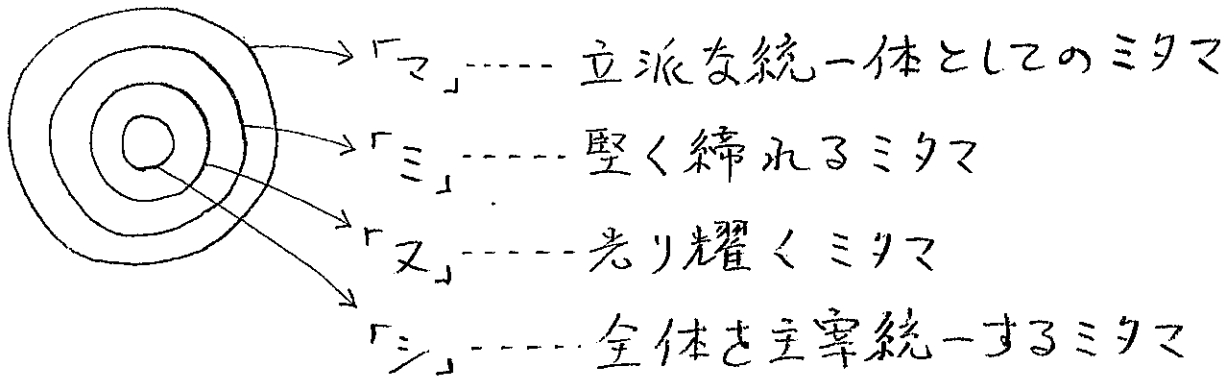
「イザナギイザナミフタハシラミオヤノカミ」も、

「尽天尽地の火としてのイザナミノミコト」も、

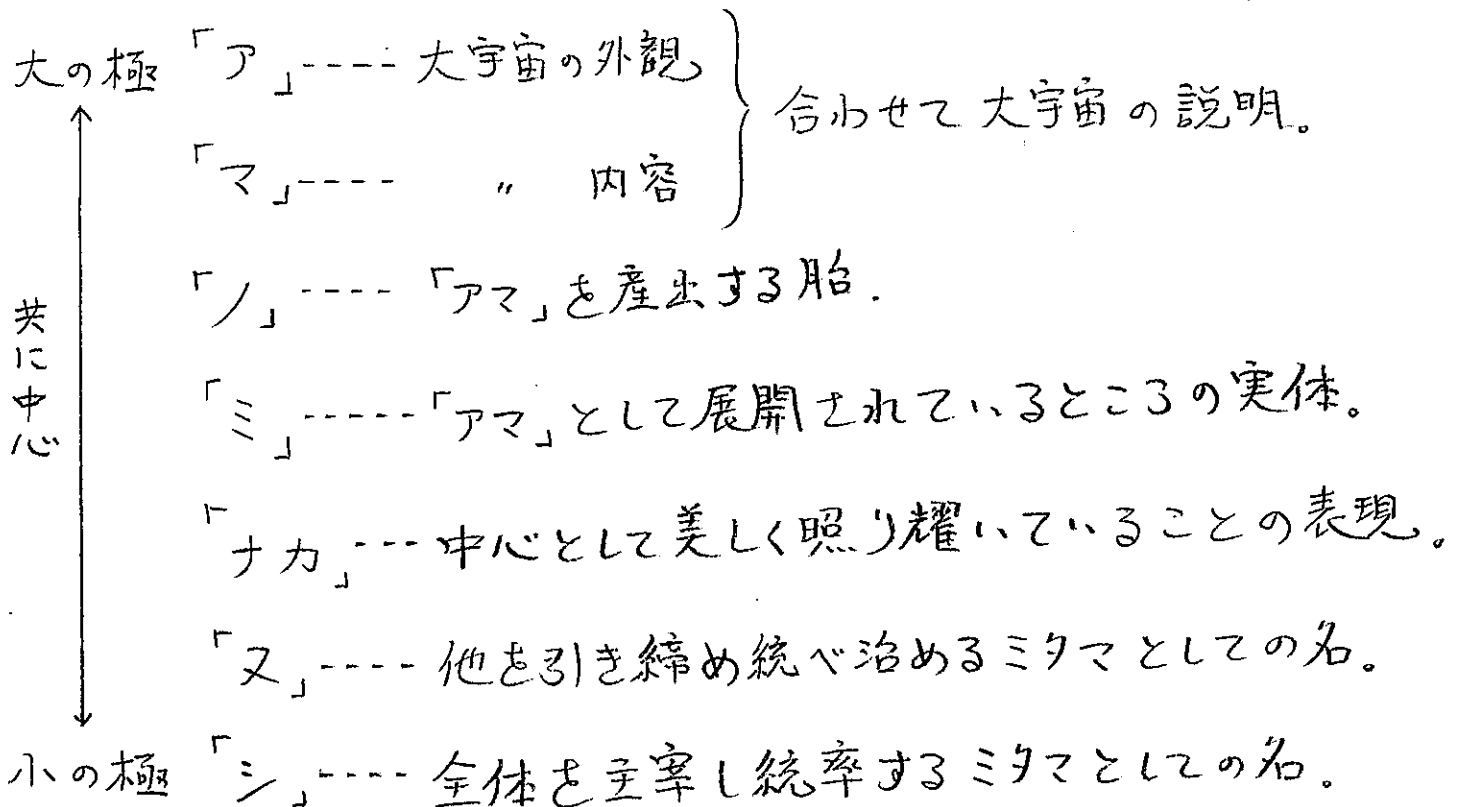
実際には、「イザナギノオホミカミ」の別名である。

A (古事記で、イザナギノオホミカミのオホミマノハラへに
よって、いたく喜んだイザナギノミコト)

川面流-----すべての統一体は「マ・ミ・ヌ・シ」の四重構造を成している。(191頁～192頁)



多田流-----「大の極」と「小の極」は共に「中心」である。



⇒「アシ」の秘言。「ウマシアシカビヒコガ」の産魂言。

して、築き成したる宇宙は、布斗麻邇と稱する一圓相を標識基準として、不斷の活動を爲すので、事業としては、直毘大直毘神の稜威を仰ぎて、失墜することなく、國土としての高天原を築き成せよとの、神の代の神の御教と拜承しまつるのである。

「しほ」の内容として、此に擧げた古典の詞は、神の詞であるから、そのまま、神であつて、また、その神徳の妙用を教へられたのである。が、之が委しき説明は、「言靈祕説」を待つことにしよう。

第八、「生神」とは、別天神たる隱身の獨神が、八百萬の神を生み給ふので、「惠保婆の神は、宇宙の外に在りて、宇宙を造り給ふ」と云へるもので、「神の獨子たる基督を降し給ふ」と稱するもので、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神は、別天神たる獨神の陰陽で、それが、國嶋をも、國嶋を統治す主宰者をも、生み給ふので、二柱神の共に生みませる嶋は、十四嶋で、神は、三十五神で、天地と分割きたる時、國嶋としては、高天原たる境地で、神としては、高天原統治の日神で、天照大御神と稱へまつりて、三十五神にてましますので、その三十五神とは、波留比比咩と稱へまつるで、我期大君にてましますので、國家としては、天皇と稱へまつり、人天萬類としては、直日と謂しまつり、大虚空としては、二柱祖神と仰ぎまつるのである。此の二柱祖神と稱へまつるは、生神の妙用で、祓禊と白しまつるのである。

第九、「豫母都志許賣」は、如何にして生れたのか。日本紀には、泉津醜女と書き、極端に醜惡なる女と解釋してある。「伊邪那美命の命せをよそにして、伊邪那岐命の投げ棄てられた黒御鬘の蒲子を撫ひ食ひ、筍を抜き食ひなどした」とは記載して居るが、それだけでは、其の本質を明瞭にすることが出来ぬ。

「愛しき我が那邇妹としての伊邪那美命を、一火にて見給へば、宇土多加禮斗呂岐て、何に例へやうもなく

醜惡なる御體なのに驚き給ひて、伊邪那岐命は逃還られた」とある。

「伊邪那岐」とは、陽で、積極で、進で、取るで、勝つのであり、「伊邪那美」とは、陰で、消極で、退で、逃避で、亡命である。別の方面から、此の二語を解釋すれば、神と魔と、美と醜と、正と邪と、善と惡と、或は、天地、明闇、高低、大小、長短、賢愚、利鈍、貴賤、貧富、等と稱すべきで、活用としては、破壊と建設と呼ぶところの「修理固成」である。「一句之中、音訓を交へ用ゆ」と、古事記の上表文に記されてあるところの一例が、此の四字で、「修理」を「すり」に當て、「固成」を、「固め成す」と訓ませたものである。

之を斷言する所以は、此の神勅が、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神に詔せて言依さし賜ひし」ところであるから、陰と陽との、體なり用なりでなければならぬことが明瞭な爲である。

その「修理」とは、破壊で、火神の活用で、御母命をも、炙き殺し給へるものである。「すり」の音義は、鑢、等の「すり」と等しく、其の「す」は、酢、進、銳、等の「す」で、又、接頭語としての「す」で、表から見れば、銳利の義で、裏には、敏活の意を潛めて居る。「り」は、上の音義を強むると共に、神代の言としての「りむさく」の義で、「すり」と合せては、調伏、濟度、救出で、改造の意を含んで居る。其の用を、「火神の母命 伊邪那美神は、八種雷を初め、黄泉魔境の主として、國の人草を、一日一日に、千頭づつ絞殺す」と記されてある。

之は、破壊であるが、單なる破壊ではない。「僕は妣國根之堅洲國に罷らんと欲ふが故に哭くのである」と、建速須佐之男命の御言に依り、伊邪那美命の國は、根堅洲國とも呼ばれるので、其處には、「葦原色許男が、須勢理毘賣を負ひ、生大刀と生弓矢、また、天詔琴を取りて、逃げ出したる時、建速須佐之男命が、黄泉比良坂ま

幸81頁 9行目～13行目

語句を補って、次のように解釈した方が良くと思う。

『イザナギイザナミが共に生んだのは14島・35神である。

これは、特別の境地に到達してみれば（^{アマツ}天地と^{ヒラ}割割きたる時）

（「このまこのまま高天原」と言うのと同じような意味で）

14島はこのまま高天原たる境地である）

35神はこのまま高天原^{ヒノカミ}統治の日神（天照大御神）である。

この35神はそれ自体としてはハルヒメという外郭だが、

この境地に到達してみれば、これはまた^{フタツノヒカリ}（) という中心

（即ち、35神の親/本体であるイザナギイザナミ）である。

このイザナギイザナミを「二柱御祖神」と称する時は、

^{ミコウミ}こうした^{ミハツチ}生神の妙用に着目してこう呼んでいるのである。』

（^{ミヅ}みずから^{スミ}経となり^{スミ}緯となり^ミ相交わり

新たな箇体を形成する作用のこと。

無宇宙から宇宙を産み出す作用を象徴する神名が

アマノミヤ イザナギイザナミ フタハシラノミ である。

幸74. 神国築成のためには、^マ○と^マ○の抱合合体により、
何らかの「新たな箇体」を成立させることが必要である。

こうした「新たな箇体の成立」は、神話上では、^{ミコト}生神と
表現されており、

それを成す代表的な神格が、イザナギイザナミ であり、
フタヒツラミオヤノカミ

よって、この神名を唱えることそれ自体が、
神国築成を助ける力となる。

幸81. 即ち、イザナギイザナミ（本来は「別天神たる隠身の貌神」）
が八百万の神を生み給うたのだから、
我々もまたそれに倣い、この神名を唱えることにより
新たな箇体を形成し、ひいては神国を築成するのである。

ナホヒ^{ナホヒ} 直^{くうれい}靈^とと空^と零^と

⑤ 根本資料 → 組み合わせる → 構造体 ⑦

無
宇
宙

ナホヒ^{ナホヒ}
直^{くうれい}靈^と
ヒ^と
(零)

ムスビムスビ^{ムスビムスビ}
産^と靈^と産^と魂^と

ヒノカミ

日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

〃

ナホヒ^{ナホヒ}
根本魂・直日^と
(箇体の中心)

ミヅガキ^{ミヅガキ}
瑞垣

流出 (イザナミ)

統率

(アマテラス) ----- (左に 統率 神習って)

統率

宇

空^{くうれい}零^と
ヒ^と
(零)

国生み
(イザナギ)

十四島・三十五神

マガツビ②

カミ^{カミ}
神に帰順したる妖魔^{マカツビ}
(上位の身魂・外郭)

死後、解体される。
(ツキヨミ)

調伏 (スサノヲ)

宙

神話では
ヒルコ

マガツビノムシ^{マガツビノムシ}
妖魔群 1

生前、罪や穢れを祓われる。
(スサノヲ) (肉体身、など)

マガツビ①

(ヨモツヒラサカ)

素材領域

箇体領域

宇宙では、ヨモツウニ
(イザナミ)

宇宙では、ナカツウニ
(イザナギ)

故人未教處世之秘

多田山公秘稿

大正の人道は人天萬類の生滅起伏するところなれば、大宇宙道にして天神諸命にして天命にして命なり。

命とはミコトノリにしてミコトにしてノリゴトにしてミコトにして、ミコトノリにしてアマツカミクニツカミにして、天地にして五十五にして百八にしてヒフミヨムナヤコノタリヤモモチテミナリにしてヒトにしてフタハシラミオヤノカミなり。

フタハシラミオヤノカミとは大洋神國津神なれば天常立國常立にして伊邪那岐伊邪那美にして伊邪那岐命伊邪那美命二柱神なり。

天讀日天狹霧國禪日國狹霧尊と云へるも天なる神國なる神にして天成地定の曉なり。

天房地定とは倉世氣に託したる二つの光にして、天の水と地の水とにして日なる二日なり。日を二日なりとは、日の字類

が傳ふるところにして、玉篇に④と載せて太陽の象形なりと云へるもの。

④とは④にして④にして〇或は□なる零が兩儀なりとの訓にして、宇宙ならざる宇宙が、宇宙を現はすには内に兩儀を含めるに依るとの黙示録なり。

察よ。

④は四の合体にして陰陽にして陰陽にあらずしてメなり。

メなりとは、孔(めど)にして差(め)にして、四が陰なる如く

凸も陰にして、兩陰の生産するところを宇宙なりとなすなり。

之れを③なりとは、左右の二が合して一なり一にして二なり二にして一なり不二なり不二なりとの教へにして、鼻と其の兩孔との如くにして、不二不一を指示したるなり。

寺書に陰陽男女の生産をなりと記せるものは陰陽共にメなりとの黙示録にして、左目を洗ひたまへば天照大御神なる日神出生し、右目を洗ひたまへば月讀命なる月神出生したりと日本神話の傳有る所以にして、太陽も太陰も共にメなりとの黙示録なり。

陽もメなり、陰もメなり。

メドにしてメバへにして、共にメなり、女・孔・陰・四・目・而して陽・凸・差・目、而して

陰なり零なり兩なり。アメなり奇靈絶妙なりとの黙示録なりとは知るべきなり。

アチカシコ。

以上 昭和十三年五月二十一日

土曜日 雨

葛城野一言主

多田山公秘稿

葛城野一言主の神事は、悪を善に、醜を美に、邪を正に化育する祕言靈にして「マガゴトモヒトコトヨゴトモヒトコトワレハカツラギノヒトコトヌシノカミノカミワザ」と傳承せるところなり。

人間世界の森羅萬象は善惡美醜正邪曲直の交錯變転にして、寸時も靜止することなく生滅遷流しつづつあること、目睹することの如くなり。

生滅して止まらず、交遷して息まず、流轉して安からず、錯綜して通ぜず、交易の時ならざる現象を判別し整理して正邪曲直善惡美醜を明瞭に知らしむる神徳を「カミ」と稱へて最大の天、最小の地なる絶對なり。

最大最小の天地を葛城野一言主と稱へまつるは神言靈（かみのことたま）にして、其の音義が如是の妙用を現する實相にして、如是の妙觀なるなれば、之

れを「カミ」と稱へまつるなり。されば、「カミ」とは「カツラギノヒトコトヌシ」にてましますなり。

其の音義の妙用とは一音響の神徳にして、實相の照觀とは一圓相の妙音なり。

一圓一音の妙用を妙音觀世音なりと稱ふるは、即「カミ」なりとの義にして、印度佛教に云ふところの阿彌陀佛音なり。

日本民族傳承するところの神言靈に「マガゴトモヒトコトヨゴトモヒトコトワレハカツラギノヒトコトヌシノカミノカミワザ」と稱へまつるは即、阿彌陀佛音にして、此の生死遷轉の現象世界に在りて實相眞如の淨地を築き成すなる祕事なり。

之れを「アマノヌホコ」と稱へ「イザナギイザナミフタハシラノカミ」とまうじまつるなり。

「フタハシラ」とは二柱と古老が支那文字を充てたる如く「マガゴトモヒトコト」「ヨゴトモヒトコト」の正反對なる二音響にして二圓相なり。

天地なり、陰陽なり、男女なり、雌雄なり、凹凸なり、美醜なり、善惡なり、正邪なり、曲

直なり、明闇なり、日月なり、ヒツキなり、ヒツギなり、天津日嗣なり、生死遷流にして天壤無窮なり、「イノチ」なり、命（みこと）なり、命（おほせ）なり。

而して神魔なり、神魔割判して同凡に在るなり。

「ハハソハ」と名づけ「ソノトコソイヘ」と教へ給ふところなり。

古典に天地初發と云ひ、天地割判・天地割割・天地初判、又は天地^別割と記載したるところにして、天浮橋を築けるものなり。

此の天浮橋にして天沼矛搖き鳴らし給ふとは「ミトノマガハヒ」にして、神人産出の祕事なり。

二圓相の合するにあらずして破（わ）るるなり。

割れ盡すなり。

割れ盡すが故に一切を合せたるなり、一切を捨つるが故に一切を有つなり。

之れを「チヨノイノチ」と稱へて命（みこと）無きの命（みこと）なり、「イノチ」無きの「イノチ」なり。

二音響二圓相の一音響と化り一圓相を現じたるなり。

一音響は即、一圓相なれども一圓相は一音響なるにはあらずとて、之れを非と云ひ、否と呼ぶは靈（ひ）にして、魂（ひ）にして、靈（ひ）にあらずして、魂（ひ）にあらずして、魂（ひ）にして、靈（ひ）にして一（ひ）なりとの義なり。

空にして空にあらず、空にあらずして空にして、空にあらずして空にあらずるにあらざるにあらざるなれば、極無極の日（ひ）にして、極大極小の火にして、無際無涯の一（ひ）にして、無宇宙の非（ひ）にして絶相對の否（ひ）にして、一圓一音にして、五重七重にして、宇宙無きの宇宙なれば、中心無きの中心にして、「カミ」にあらず「ヒツキ」にあらず、人にあらず、物にあらず、天地にあらず、陰陽にあらず、男女・雌雄・凹凸・美醜・善惡・正邪・曲直・明闇・日月等にはあらざるなれば、大宇宙となし大宇宙の中心と呼ぶべきか、非宇宙となし非宇宙の非中心と呼ぶべきか、無宇宙となし無宇宙の無

中心と呼ぶべきか。

皆共に完からざるを憾む。

幾何學に云ふところの點なれども、位置を示すと定義する時は既に當らず。

故に今假に大宇宙の大中心と呼ぼん。

大宇宙の大中心とは一圓にして一音なれば、宇宙にあらず、宇宙の中心にもあらずして、宇宙を築き、宇宙の中心を成する一點にして「ヒ」なると共に「メ」なるなり。

之れを「ヒメ」の祕事となすなり。

「メ」とは母胎にして、女陰にして、国土にして、家にして、畧境にして、神命なれば「イノテ」なり。

目なり、芽なり、女なり、命（いのち）なり、生死遷流なるなり。

故に「メ」とは「アマテラススメオホミカミ」にして、「ヒメ」とは「アマテラスオホミカミ」にてましますなり。

之れを「イスズヒメ」と稱へまつるは「ヒメカミワザ」の「ヒメコトタマ」にして、「カミノコトタマ」なる極大極小の「ヒ」な

るなり。

「ヒメ」にして「ヒ」なるなり。

故に「イザナギノミコトイザナミノミコトフタハシラノカミ」と稱へまつれば「大宇宙の大中心としてのカミ」なりとの義にして、「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と稱ふる時は「善惡美醜正邪曲直判別の神徳」との義にして、「イザナギノカミ」と稱へまつるは「神界築成の神徳」との義なるなり。

其の然るは「カミノコトタマ」の然るなり。

人間造作の名称ならざるは固よりにして、人間歴史上の人身の身魂としての神徳なりとの義にもあらざることを、また固よりなり。

されど、人間歴史上の人身としての身魂が「カミノコトタマ」としての神徳を顕彰することゝまた固より當然の事理なるなり。さればとて、某甲の死後、其の身魂が「イザナギノカミ」にして、或は「アマテラスオホミカミ」にして、亦は「カツラギヌシノカミ」にして、又或は「ニギノミコト」にてましますと

云ふにはあらざるなり。

人身としての身魂が大宇宙の大中心に歸入したる時は、生死を隔てずして直に「カミ」たるの御徳を顕彰するが故に、「イザナギノカミ」たり、「アマテラスシマスオホミカミ」たり、「アマテラススメオホミカミ」たり、「アメノミナカヌシノカミ」たり、「カツラギヌシノカミ」たり、「ニギノミコト」たることを、一音琅琅として邊際無く一圓晃耀として極無極なるなり。

されば「カミ」は「ミコト」と成り得たる一切の神徳にして即、八百萬神なるなり。

然れども「一神が萬神を顕はす」とか「萬神は一神に歸す」とか云ふが如きものにてはなきなり。

「ミコトの神徳は一多を總べて餘すところ無し」と雖、一神にあらず、萬神にあらずして「カミ」たるなり。

「カミ」は「カミ」にして他の何にてもなきなり。

即、大宇宙の大中心としての「ミノリ」なるなり。之れを神命なり、「ミコト」

なりとなすなり。

「天津神の命（おほせ）」と古典に載せたるは此の義なれども「天津神國津神の命（おほせ）」とか「天地（あめつち）の神の命（おほせ）」とか記すを正しとすべきなり。

省略の文法として通ずるなれども、後人殆悉く誤解して「天神諸命以」を、天津神の命（おほせ）以ちてと讀み得ざるに至れるなり。

「天地（あめつち）の神（かみ）の命（おほせ）」とは「イノテ」にして、「天壤無窮」にして、別れては「カミ」たり、合しては「ヒト」たり、別れて合ひては「ミコト」たり。

「カミ」とは「ヒ」にして、「ヒト」とは「ヒビ」にして、「ミコト」とは「ヒミリ」にして「ヒ」なるなり。

「ヒミリにしてヒなり」とは極大極小の「ヒ」としての最大最小の活動なるなり。

其の最大最小の活動を天津神國津神の命（おほせ）と稱へまつりて、神命（しんめい）なるなり、命（いのち）なるなり、命（みこと）なるなり。

此の最小最大の點を「カミ」
と稱へて「カツラギノヒトコト
ハシ」にてましますなる「ヒメ
トタマ」にして「カミノコト
ツマ」にして「カミコトタマ」
にして「コトホギタマ」にして
「ウタ」にして「ヒト」にして
「ナホヒ」にして「オホナホヒ」
にして「カムナホヒ」にして「カ
ムナホヒ」にして「ナホヒ」に
して「ノリト」なるなり「ミコ
トノリ」なるなり。

「アアヒガテンジンユウアイ
ノウ」と稱へまつるも、「トラ
ハミエミタメ」と稱ふるも、「ア
マツヒコヒコホノニニギノミコ
ト」と稱へ、「アマテラシマシ
メススメオホミカミ」と稱ふる
も、「アメノミオヤアメユヅル
シノアマノサギリクニユヅルヒ
ノクニノサギリノミコト」と稱
ふるも、「ユクヒトノココロシ
レラバカニカクニトクカヘリマ
ヒイツガシガモト」と稱ふるも
皆共に神徳にして、神命にして
「カミノコトタマ」なるなれば
「ノリト」にして神の御名にて
ましますなり。
故に「カミ」と稱ふことは
一なれども、御徳としては千變

萬化する現象世界を統治し化育
し給ふなり。

之れ人間身として窺ひ知るこ
と能はざるところなれば、「カ
ミ」の「ウケヒ」に依りて人生
を経綸したまふは、「カミ」の
爲し賜ふところにして、神人の
參與を命ぜらるるところなるな
り。

葛城一言主。

以上 昭和十年七月二十七日

書寫

ふさのうみさちこそきよれな
つやまのまさきのかつらふゆを
こそまで。

ささのくまひのくまがはにこ
まとめてしばしみづかへかけを
だにみむ。

うた

「ウタ」とは「カミ」なり。

今人の歌謡と呼ぶは、音楽な
り詩歌なりと稱して、人の感情
思想の一部を詠出するものなり
と定義を立て居れども、日本民
族伝承の「ウタ」とは、斯の如
き狹隘なる浅膚なる卑俗なる低
劣文芸を指したるにはあらざる
なり。

「ウタ」とは「カミ」なれば
「ノリト」なり。

「神言靈」にして「カツラギ
ノヒトコトメシ」なれば、一音
響の示音なり、神音なり、妙音
なり、観世音なり、妙音観世音
なれば梵音なり、海潮音なり、
阿弥陀佛音なるなり。

日本民族は幸にして、許多の
「ノリト」を傳承せり。

今日之れを類別して後世子孫
に貽さんと欲す。

アチメ オオオ。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

ウウウ。ウ。ト。ウト。ウ。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

ハルヒヒメハルヒヒメハルヒ

ヒメ。

アチメアチメ オオオオオ。

ア。

ウ。

以上 昭和十年七月七日

大日本祓禊所 語部宮

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

はるさめのおとこそたたねく
さもきもどりいろますはるさ

めに。

春雨の音こそ立たね草も木も
綠色増す大和國原。

白百合の咲きたる宿に我れ遊
ぶ瀧のとどろく山の峽間に。

以上

『死者何處にか往く。之れを聞けども知らず。』

人は皆、生れて來た。過去の人、皆等しく死し去つたのである。現在の我等も、亦必、死ぬであらう。斯の如く、生と死とは、人間身は固より、一切の生物が、經過しつつある事實である。自己の經過しつつある事なのに、どうして、それが明瞭せぬのであらうか。自己のことを自己が知らぬのであるとすれば、何れに向つて尋ねようか。仰いて眺むれば、天は蒼蒼として語らず。伏して聞けば、地は黃黃として黙つて居る。

『蒼蒼たるは天か。黃黃たるは地か。』

生を知らず。死を知らず。天を知らず。地を知らず。我と思ふところの此の肉體身も、此の靈念思考も、果して我であらうか。懷疑は懷疑を孕みて、呆然、前後を辨ぜざるに到るのである。

『古人之れを號^{ナツ}けて宇宙となす。』

此の天地。此の人身。此の生。此の死。此の出沒變轉。我は、我が來るところを知らず、我が往くところを辨ぜぬ。が、古人は、之を宇宙だと教へて居る。

『宇宙とは經緯なり。』

「宇宙」の字を、日本紀などには、天下^{アマノシタ}と訓み、現今の人は、存在する限りだとか、天文學者の認め得たる限りだとか云つて居る。けれども、本來、此の字は、經緯^{クテスキ}の義なので、宇は經^{クテ}で、宙は緯^{スキ}である。經^{クテ}が有り、緯^{スキ}が有ると云ふのは、存在^{アリテアルモノ}であるとの義で、實在^{ナクテアルモノ}の結び結ばれて、それが、人天萬類なりと、人天萬類各自に認識したる實體であるとの意である。それは、幾何學に云ふところの「點」ではないので、「線」でもないので、

「面」でもないので、「點」の結び結びたる「線」と、「線」の結び結びたる「面」と、「點」と「線」と「面」と

の結び結びたるところの、「球」なのである。此の「球」であつて、はじめて、^{タテ}經と^{ヨキ}緯とを完備したと云ひ得るのである。之を、宇宙を構成し得たと云ふので、「天祖天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊」と稱へまつりて、日本民族傳承するところの「神」^{カミ}にてましますのである。「かみ」の「か」は^{タテ}經を示し、「み」は^{ヨキ}緯を指して居る。其の故は、「か」の音義が、晃耀赫灼で、天を表し、「み」とは、充滿實塞で、地を示すので、天と地とは、乾と坤とも云ひ、陽と陰とも、男と女とも、雄と雌とも、凸と凹とも、一と二とも傳へられて、父と母との義である。それ故に、日本の古典には、「二柱御祖神」と稱へまつり、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神」と記されてある。經なるは父、緯なるは母と稱へて、宇と宙とである。此の宇とは、宙を待ちて初めて宇であり、宙もまた、宇を待ちて初めて宙である。經が有つて初めて緯であり、緯が有つて初めて經であり、乃至、父が有つて初めて母であり、母が有つて初めて父であるのと同様である。其のやうにして初めて簡體が成り立つ。

『^{タテヨキ}經緯の存在は簡體なれば。萬類萬物は各自に宇宙を構成しつつ宇宙の内に在るなり。』

その簡體は、重重又重重に、重なり重なつて、人と成り物と成り、我であり、彼であると、人皆は認むるに到るのである。それで、六尺の人間身裡にも、重重又重重の簡體が住んで居る。人天萬類は、地球星裡に住み、群星は、太陽系中に住み、又更に、群太陽系は、大宇大宙と、相互に出入往還しつつ、重重無盡の圓光球裡に、重重無盡の生死起滅を重ねて居る。人天萬類は、相互に、自己の世界として、自己の活動し得ると思ふところの僅少なる範圍内だけを認めて、出頭没頭して居るのである。

『宇宙の内に在る宇宙とは小宇宙なること當然なれば。人類は固より。萬物亦皆小宇宙なり。』

『宇宙の内に在る宇宙にして宇宙を知らず。人身にして人身の起伏往來を辨ぜずとせば。必竟亦之れ天地の間

醜惡なる御體なのに驚き給ひて、伊邪那岐命は逃還られた」とある。

「伊邪那岐」とは、陽で、積極で、進で、取るで、勝つのであり、「伊邪那美」とは、陰で、消極で、退で、逃避で、亡命である。別の方面から、此の二語を解釋すれば、神と魔と、美と醜と、正と邪と、善と惡と、或は、天地、明闇、高低、大小、長短、賢愚、利鈍、貴賤、貧富、等と稱すべきで、活用としては、破壊と建設と呼ぶところの「修理固成」である。「一句之中、音訓を交へ用ゆ」と、古事記の上表文に記されてあるところの一例が、此の四字で、「修理」を「すり」に當て、「固成」を、「固め成す」と訓ませたものである。

之を斷言する所以は、此の神勅が、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神に詔せて言依さし賜ひし」ところであるから、陰と陽との、體なり用なりでなければならぬことが明瞭な爲である。

その「修理」とは、破壊で、火神の活用で、御母命をも、炙き殺し給へるものである。「すり」の音義は、藥、鑪、等の「すり」と等しく、其の「す」は、酢、進、銳、等の「す」で、又、接頭語としての「す」で、表から見れば、銳利の義で、裏には、敏活の意を潜めて居る。「り」は、上の音義を強むると共に、神代の言としての「りむさく」の義で、「すり」と合せては、調伏、濟度、救出で、改造の意を含んで居る。其の用を、「火神の母命伊邪那美神は、八種雷を初め、黄泉魔境の主として、國の人草を、一日一日に、千頭つつ絞殺す」と記されてある。

之は、破壊であるが、單なる破壊ではない。「僕は妣國根之堅洲國に罷らんと欲ふが故に哭くのである」と、建速須佐之男命の御言に依り、伊邪那美命の國は、根堅洲國とも呼ばれるので、其處には、「葦原色許男が、須勢理毘賣を負ひ、生大刀と生弓矢、また、天詔琴を取りて、逃げ出したる時、建速須佐之男命が、黄泉比良坂ま

それは兎に角として、私どもが歌を詠むのは、詞として教へられた神を讚美しつつ、我もまた神の完きが如く完かんと願ふので、作歌に志すものは専念一意神の御教を仰ぎまつるべきである。

神の教へ給ふ歌ウタノコトバ 詞は幾種幾様であるか、人の身として知り得るところではない。人は唯、教へられたる範圍内で、知り得たることを褒め讃へ歌ひまつれば可いのである。

以上第一章 終

第二章 歌詞の基準

○大字大宙に標識基準を示し給ふアメノミナカスシノカミ天之御中主神とは、換言すれば原型である。宇宙構成の基準である。之れを人間の位置から仰げば原型の原型のそのまた原型である。それは、純一不可分の靈ヒで、極小の一ヒで、極大の靈で、其の御活用を人間的には二柱御祖神と仰ぎ伊邪那岐命伊邪那美命二柱神と称へまつるのである。其の原型が中心たる位置に着かせたまへる時には主の神天照大御神にてましますのである。其の時の御有様を「伊邪那岐命大歡喜詔。吾者生生子而。於生終得三貴子。即其御頸珠之玉緒母由良邇。取由良迦志而。賜天照大御神而詔之。汝命者。所知高天原矣。事依而賜也。故其御頸珠名謂御倉板拳之神」と古事記に載せてある。

御倉板拳之神とは伊邪那岐命の御頸珠である。それをお持ちになつて天照大御神は高天原を御統治遊ばれたのである。物に寄せまつりては御頸珠と称するので、「それを持ちて」と白しますが、その物を忘れて観れば、「於ココ

ニアマツカミノミコトモチテ
是天神諸命以[○] 詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神。修理国成是多陀用幣流之国。賜天沼矛而。言依賜也」と古事
記に記されたやうに、「天神諸命」であり、「天沼矛」であり、「修理固成」であり、「天命」である。之を種子
とし資料として天照大御神の高天原は築き成さるるのである。

けれども、其の「築き成さるるのだ」とは、仮に客観し得たりとしての説明であるから之もまた事実ではない。
事實は産霊産魂たる玉緒で、其の完成された箇躰は国常立尊とたたへまつるのである。

箇躰を示したる神は国常立尊と称へて、一円一音昭昭琅琅の光である。此の箇躰とは宇宙の中に在る宇宙
で、宇宙無き宇宙と等しき實在で存在であるから、零に等しくして零ではない。○だと云ふのである。此の○
とは人の眼に仰ぎ見る名称であるが、印度の古典には「其ノ御声を觀て解脱るべきなり。妙音觀世音梵音海潮
音・普門示現」と伝へて○の音を教へ、猶太の古典には「詞は神なりき」と伝へ、日本の古典は「言靈の幸。
葛城一言主・天成音棚機」と教へて、白玉光底泉声潺湲の零を悟証る方便を遺されたのである。

専心一意神の言靈を称へまつれば、其処は神の国で其の人は神の人で○の天地で国常立尊の幸である。
国常立尊の幸としての人が神の教へのままに詠む歌は等しく国常立尊の幸である。之を統一魂と称へ妙
音天鼓と仰ぐ。輒、神音で言靈である。



物理固成ののりせ

クストスフル。

アキオノウシ。

タヤヨリモナサ。

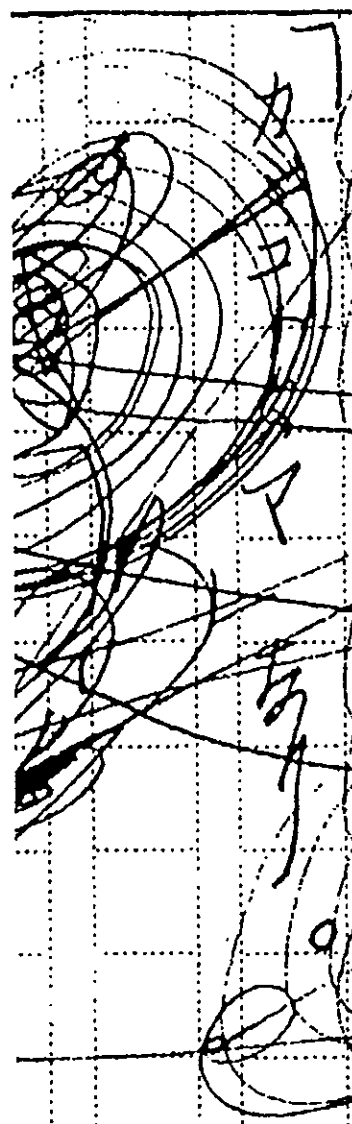
カヘホ。

セコムトネソヤナクレチル。

キハヌシツクスロニラビケテメ。

ル

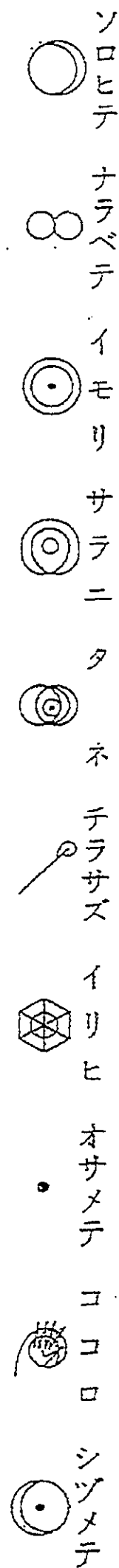
金音義は、
 破壊鬼集、收藏、整理、建設、大成の義
 にして、初めの七音は、魔軍の「コトタマ」次
 の六音は、君民同治の「コトタマ」次、次の七音
 は、海神の「コトタマ」次、次の三音は、天御
 鏡尊の「カミカサリ」次、次の十二音は、伊邪
 那岐尊の「カミコトタマ」次、次の十六音は、
 生々轉生の義なる、
 塩土公卿の間與堅固の



「修理固成・天沼矛」の説明

「修理固成・天沼矛」の「修理固成」とは、「資料」を整理して、完全圓滿の箇體を築き成す「用」を現し、「天沼矛」とは、その「體（体）」を表現しており、さらに、資料整理の為、分解作業を司るのが「修理」で、「すり」と訓み、「総合し統一して造り上げる」ことを「固成」と表現し、「すりかためなす」と訓んでいます。（幸七七）

「天沼矛」は、「修理固成」の働きを発揮する「主体」であり、「修理固成」のやり方としては、以下の十種類の図とカタカナの説明で表されており、それにより、その神業を完全に成し遂げることができる、とされています。



また、「天沼矛（アマノヌホコ）」とは、「祓禊の神器」としての主神であり、「修理固成（スリカタメナス）」とは、「祓禊の言霊」としての司神である、としています。

そして、「天沼矛」の「印相」を以って「イエーツ、エーイツ」と大音声を発し、印相を以って空間を絶つと、その音声が「二線の光明」となって、「宇宙」を貫き通すとされています。

そして、この神業は、「氣吹戸主の神業」とも言われ、「妖魔調伏の秘事」とも言われています。

そして、この「二線の光明を発する実体」は、「我」であるが、我の内に結ばれた「陰と陽」との「両極」がその活用を表したものであり、この神事の印相は、「天御柱・国御柱」を象徴し、合わせて「心之御柱」と称えまつり、「神の御座」ともいわれます。(幸七八)

「神話」に、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神が、いざなぎいざなみふたはしらのかみ 淤能碁呂嶋おのころじまに天沼矛を指し立てて国の中の天御柱となされた」とありますが、この表現からすると、「国」とは、「外郭」で、「と表し、「天御柱」とは、「中

心の一点」であると共に「国を統率した」ので「（ヒカリ）」と表現され、即ち、「（ヒカリ）」が「天御柱」であり、之はまた「国を統率した」ので、「国御柱」ともいえるのである、としています。

すなわち、この「（ヒカリ）」は、「国御柱」であり、「天御柱」であり、合わせて「心之御柱」ともいえるのであり、これが、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の「神業」であり、之を「陰陽（メヲ）」と称え

るのである、としています。

「㊦（ヒカリ）」をこのように表すのは、分割の極として、すべての物は、「二つ」ではあるが、それを構成する概念は、「陰^メ」と「陽^ヲ」の「二つの存在があること」を表現しているのであり、「極」は、「陰陽の合体したもの」である、ということの意味しています。

そして、「㊦（ヒカリ）」を日神とも称え、日とは、二つの光で、「㊦（メヲ）」とも呼ばれる㊦^ヒが、「神人産出の胎」である、としています。

『振魂』は、「ふるみたま」を意味し、「奇身魂」のことを言う。

「奇身魂」とは、「光一元の心身」のことを言う。

「伊邪那岐命は、天照大御神に、御頸珠^{ミクビタマ}を賜ひて、汝が命は、高天原を知らせと詔せられた」とあるが、その天原とは、清み澄みて明み切りたるなれば、「眞澄鏡^{マスマシノカガミ}」で、それは、中心と外廓との完全に統一したる象であらう、「日像鏡^{ヒカタノカガミ}」で、和魂の宿るところであるから、「眞經津鏡^{マフツノカガミ}」で、生み生みて限り無き御祖にてましますか、「増日鏡^{マズヒノカガミ}」で、「増靈鏡^{マズヒノカガミ}」で、發き發きて涯無き奇靈^{クシビ}であるから、「増鏡^{マスカガミ}」で、「天地初發^{アミ}」で、「その高天原に成ります神、天之御中主神」の知ろしめすところであるから、その神は、またただちに、天照大御神にてましますことおのづから明である。

その高天原は、唯一であつて、重重無盡又無量であるからとて、「ヒトツ」と呼ぶ。さうして、^{ヒトリ}と書いたのは、此の故で、「鹽田表品固表品に壹き成したまへる^{オノノコロシヤ}淤能基呂嶋^{オノノコロシヤ}」である。

「淤能基呂嶋に天降り坐す」は、二柱御祖神で、それは即、天御柱^{アメノミヘシラ}で、中心の一點である。その一點の裏は、^{クニノミヘシラ}國御柱である。二つであつて一つなので、その一である^{ヒツツ}「大虚空」を拜みまつれば、その中心には、その全體を主宰統率し給ふ天之御中主神、即、天照大御神の坐しますのだとの意で、唯見る大虚空も、その大虚空の大虚空たり得るは、天之御中主神の坐しますが故で、八百萬神の暮息し給ふは、二柱御祖神の坐しますが故で、その晃耀赫灼たるは、天照大御神の治ろしめし給ふが故である。

古典には、「天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神」とあり、また、

伊邪那岐命大歡喜詔。吾者生生子而。於生終得三貴子。即其御頸珠之玉緒母由良邇。取由良邇志而。賜天照大御神而詔之。汝命者。所知高天原矣。事依而賜也。故其御頸珠名謂爲倉敷舉之神」と載せてある。

古老今人志不同

多田山公

（一）

昭和十三年三月、平和郷に入り、安楽浄土の佛刹を築く。

其の状は方に似て然らず、圓に似て圓にあらず。

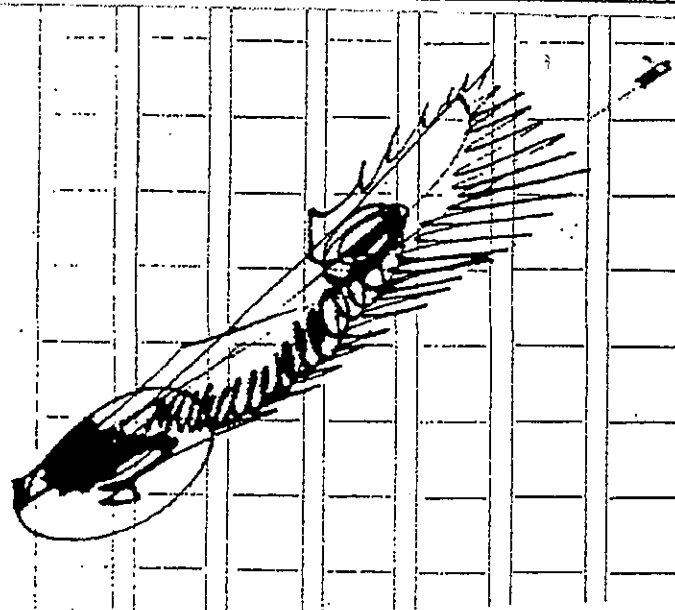
日本民族は太古以来、幣（ヌサ）と称へて墓標とはなしたるなり。

故に幣とは奉獻したるなり、捧げたるなり、身心を奉獻し終りたるなり。

而して其の標章の称呼ともなしたるなり。

大死の標章にして再生・解脱・再臨・降臨・天降・涅槃・の證左なるなり。

されば、其の人の身心に存すること因りなりと雖、形象を以つて之れを教ふるにあらざれば民人は之れを知ること能はざるなれば、別図（下図）の如く示されたるなり。



フサの音見味

るから本も末も無い零境秘数で「千座置座」と呼ばれるのである。「チクラオキクラ」とは千座置座と書かれた如く境地で際涯無き場所で無限の空間との義である。無際無涯の空間に無始無終の時間を描くものが「本打切末打断」たる「天津金木」を「千座置座爾置足」はすものである。是を神器に作れば「神籬磐境」と成る。則「宇宙」を象徴したものである。然うしてその宇宙とは「無宇宙」の結び来れるもので「零なる一」である。図解すれば○である。また□と書いても○と書いても可い。神勅に「天津神籬天津磐境起樹」と伝へたのが則是である。「天津菅菅」とは「本刈断末刈切」て「八針爾取辟」くので本も無く末も無く数限り無く発くものである。乃、生に對しては、「死」である。がその死も無いので生死解脱である。之を神器としては「奴佐」である。「ヌサ」は其の製の如く束ねたるものであり束ねて分つものである。束ねては「生」であり分れては「死」である。で「天津菅菅」とは「生死起滅」を教へて超絶零界に入らしむるものである。

それで「天津金木」も「天津菅菅」も共に○なる○である。が其の○の躰を「金木」と呼び其の用を「菅菅」と称するのである。或は「金木と菅菅」とは卜占の具であり支那に渡りては算木筮竹と成つたものだと言くものが居る。それは「太麻邇」の片鱗を伝へたので誤謬ではないが完きものではない。

「フトマニ」とは「球」である。図解すれば「天津金木・天津菅菅」と等しく○であり○であり更に⊕である。その⊕であるとは十字架で結び結べる「玉の緒」である。それは「フトマニ」なる詞が数ふるので「マニ」とは「宝珠」とか単に「珠」とか言ふに等しく調和の音義たる「ニ」と御魂の意味としての「マ」との二音合成の語で円満具足の義であり「フト」とは経過運行の「フ」とその終息休止を表はせる「ト」との合成で回り回りに結び結びて完全に統一したりとの意である。従つて「マニ」を讚美したのでもあり「マニ」をして「マニ」たらし

て、此の行事の結果を、改めて、其の身の態度姿勢と發聲とで立證する。之を、

「天津神輪・國津神輪」の祕事と稱へて、神國築成の天津宮事で、人間身として天津宮事に仕へまつるものである。それを、「詞」として現はせば、

ひとことの、かつらぎぬしや。かみまもる、もりのさかきを、わがきみの、みはかしにして。うなねつく、わがうじものよ。しづはたの、ぬさのしづりよ。みほぎする、けふのよきひよ。ももことの、にはのこすずめ。ちちことの、かはべのちどり。なにすとか、たちはさわげる。けふのよきひに。

であり、漢字で書けば、

一圓一音昭昭琅琅。即時救出六道魔界。神魔剖割在於一几。之是 日本天皇 教矣。

ともならうか。固より宮事を其のままに説明し得るものではないから、唯僅に仰ぎまつる手がかりにもと思ひて記すのみである。

第十三節

天津宮事の一つに、「ヌサ」の祕事が有る。ヌサと云ふ詞は、「アマノミナカヌシ」と稱へまつるに等しき神音で、體と用と體用不二なる事理とを教へられたので、現象世界と本體零位との關係を示し、兼ねて宇斗の祕を傳へられたのである。

ヌサの「ヌ」は、溫むので、盜むので、野で、束ぬるので、總ぬるので、統治し統率するもので、又、產出者

なのである。さうして、それは、「ヌシ」として、人知らぬ「ウシ」で、必竟「ウ」と呼ぶところの黒色黒光水晶宮殿なりとの義である。

ぬばたまの、うのはねごろも、とりよそひ、うとのみやにし、ひとのすみたる。

で、此の「ヌ」は、ウに對しては用であるが、サに對しては體である。さうして、それが、ミナカヌシのヌであると共に、ミナカヌシの五音を總括したる音である。

それから、その「サ」は、「アマ」に當るのである。「サ」とは、細かく割れて森森羅羅萬物萬象と現出するもので、神の雄走ヲハシリであり、人の事業であり、總べてのものの氣息イキである。古老は之を嘆美して「アマ」と稱した。先師は、アマノミナカヌシと稱へまつる大御名を、特に一般人に解り易いやうに説明されたが、今それを搔摘んで白しますと、

「都べてのものは、中心と外廓とから成り立つて居る。が、ただ見ただけでは、一つの物で、中心が何かに在るのか、或は無いのか、外廓と中心との區別が何こで付くのかも分らぬ状態である。單に客觀しただけでは、何と判別の仕方無いので、アーと驚嘆するばかりである。けれどもが、よくよく觀察すれば、「マ」として立派な統一を保ち、發展し歸結するミタマである。まことに驚嘆すべきミタマの存在であるからとて、日本民族は、それを「アマ」と讚美した。そのやうに立派な統一體の統一體たり得るのは何故であらうかと、その内容を検討すれば、堅く締れる「ミ」としてのミタマが内在して居る。その内はまた更に、光り耀くミタマで、「ヌシ」で「ウシ」である主魂が、全體を主宰統一して居る。其のやうに、層を成して内から外に外にと擴がつたものを、中心で引き締めて逸脱することを許さない。之は何如なる物も悉皆然うなので、全宇宙としてもまた固より其の

這りである。何如に微細な物でも、何如に廣大なものでも、一貫した筋道で出来上つて居る。

之を日本民族の詞で「アマノミナカヌシ」と稱へて、「カミ」と白しまつるの義である。圓輪を以つて圖解すれば、外が「マ」で、その内が「ミ」で、その内は「ヌ」で、そのまた内は「シ」と呼ぶ。すべて四重で、その全體が完全なる統一體を成して居る。

物として中心の無いものは無い。中心に統一せられて初めて存在し得るのである。大宇宙の然る如く、小宇宙の然る如く、國家も必然るべく、全人類世界も亦必然るべきものである」とのことである。

けれども、此の御解説は、人を導き世を教ふる便宜の爲であることは白すまでもない。人に依つて大道悟證のたよりを得んと願ふものは、此の點を忘れぬやうにせねばならぬ。私はかつて、先師におたづねしたことがある。「先生には、

大日本天皇 の大御寶として、全神教趣大日本世界教を御唱道になられますが、若も、漢民族としてならば、何う云ふことになりませうか」と。すると、「國がかはれば、またまるで別だよ」と。

相互拍手。師資哄笑。記紀傳統。一圓一音。過去無師。將來無資。

よしあしの、へだてもあらず、あをみたる、ひろのせばしと、よしきりの鳴く。

「ヌサ」と「アマノミナカヌシ」とが等しき神音だと云ふ。或は、人の疑ひを招ぐかも知れぬ。

「ヌサ」の音義は、これまでに略、説明し得たと思ふのであり、「アマノミナカヌシ」の音義も、第一章に概説したのであるが、なほ重ねて、之をうかがひまつることにしよう。

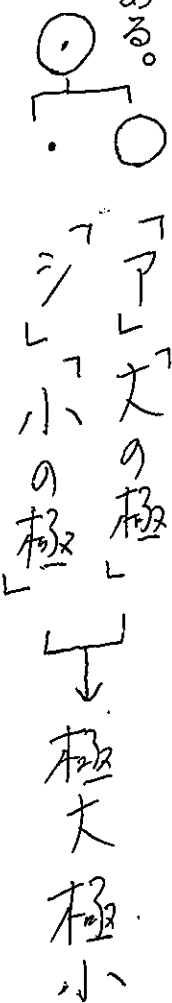
「ア」に就ては、前に磐境曲を説く際に述べたやうに、いまだ物を成さず、國を成さず、人を成さぬので、形

としてならば、何う書きやうも無いから、假に○と書く。それを詞としては「ア」と呼ぶ。が、此の○は、一切合切を包括して圓滿具足せる象である上からは「マ」と云ふのである。外から見たでは「ア」と驚嘆するのみであるが、その内を觀れば「マ」と呼ぶミタマであると云ふので、此の二音を合せて「アマ」と呼ぶのは、大宇宙の内容外觀を一語に包括し説明したのである。で、その

「アマ」なる大宇宙の大宇宙たるは、更にその内容が「ミナカヌシ」であるが故である。そのまた「ミナカヌシ」の展開たる「アマ」を産出するものは、「ノ」と呼ぶミタマである。そのやうな意味で、「アマ」と「ミナカヌシ」とを繋ぐに、「ノ」の音を以つてしたのである。此の「ノ」は單なる接續詞ではない。それから、その「アマ」と呼ぶところの大宇宙は、「ミ」と云ふ實體であり、其の實體たる「ミ」は赫灼と光り耀いて居る。大宇宙の然る如く都べてのものの中心は皆悉照り耀いて居る。美しく照り耀くものは「ナカ」であり、そのまた赫灼たるわけは、その中に、他を引き締め統べ治むるミタマとしての「ヌ」が在るからである。「ヌ」は先に説明したやうな音義で、「ノ」に等しくして僅に異なるのである。

此の「ヌ」の中には、又更に、全體を主宰し統率するミタマが在る。それは「シ」である。「シ」とは、治であり、知であり、主であり、人であり、死である。此の五字は皆共に「シ」と訓む。則、生死一貫の義で、之を形に書けば、亦等しく○で、説明すれば零であり一であるので、「極」である。

「ア」としての極は大の極であり、「シ」としての極は小の極である。さうしてそれが共に中心である。之を圖解すれば○で、圓輪を以つて「ア」を示し、一點を以つて「シ」となす。之を「アシ」の祕言と稱へて、「ウマシアシカビヒコヂ」の産魂言である。



小の極が中心だと云うことは、讀者も容易に領くであらうが、大の極が中心だと云ふことは、或は一寸躊躇されるかも知れぬ。けれども、大であれ小であれ、極と云ふからには、唯一點であること固よりで、唯一點であることと云ふものは、中心であることまた固よりで、唯一無比待對無きものとは、又唯大宇宙在るのみであることまた固よりで、此の極たる中心とは、唯是大宇宙あるのみである。之を畫いて○となすことまた固よりではないか。此の事實と眞理とが、重重無盡無量の存在と成つて生滅起伏する。それを現象世界とながめては「アマ」で、其の現象を發現する本體を究め來れば「ミナカヌシ」で、本體と現象との分際を究明し得れば、おのづから本體と現象との牆壁は撤去せられて、一圓一音昭昭琅琅、日神は天窟戸を出でさせ給ふなりと、人は拜みまつるのである。

「アマ」を現象世界だと云ふのは、「ミナカヌシ」に對するが故なので、その「ミナカヌシ」とは、大裏觀したる神界で、それをそのまま大表觀すれば「アマ」である。それ故に、天地初發としての「アマ」は、「ミヅ」の大平等觀で、稜威赫灼一圓晃耀の象である。それで、「ミヅ」に對すれば「アマ」が本體となるのである。

「アマ」を別の詞では、「日神の御田」と稱へまつりて◇と描き、また田とも、品とも描く。それは、器を產出する大海で、大虚空であるとの義で、「ヒツキ」と呼ぶ。此の「ヒツキ」の中にして、神子^{カミノコ}は生れさせ給ふ。その「ヒツキ」とは、○●であり○であり、「カミノコ」とは、▲であり「ミヅ」であり、稜威雄走命^{イツノラベシリノミコト}と稱へまつるのである。

「ヌサ」の祕事を祭儀として行ずる爲に作られた神器が存る。之は、圖解を要するのだが、兎に角、外に顯れぬ中心が在る。それは、「ウ」と呼ばれるのであり、外に細かく分れた部分があつて、それを「サ」と呼ぶ。さ

うして、此の「サ」と「ウ」とを一つに結び止めた部分がある。それをば「ヌ」と呼ぶ。之を全體として「ヌサ」と稱するのである。

此の「ヌサ」の神事は、祓の神の教へとしては、「天津菅曾を本刈り斷ち末刈り切りて、八針に取り辟く」もので、禊の神の教へとしては、「天津金木を本打ち切り末打ち斷ちて、千座置座に置き足らはす」もので、祓の神は、罪障を焚盡して火の海と成し、禊の神は、天湍河のミモヒを灑ぎて神界樂土を築き成すのである。

古老詠ふて云はく、

海は逃げ、山も躍ると、古の、ふみにぞ書ける。日の神の、わざこそ成れれ。月夜見ツキヤミの、矢こそは立てれ。白玉の、眞玉の中に、眞つぶさに、統一る中に、神こそは、鎮り伊坐せ。日止こそは、止まりてあれ。日止知らず、國は安けし。神守る、嶋ぞ統一る。海はなぎ、山靜なり。やまと國原。と。

斯くて、祓の神とは、黄泉大神ヨモツオホカミとして、根の國・底の國を治らす伊邪那美神にてましまし、禊の神とは、三貴子を生みまし給ふ中津國の主神伊邪那岐大御神にてましますことを明らめ得るのである。

今年來て、我また息ふ、綿津見の、いろこの宮は、神の常宮。

第十四節

朝早く目の覺めたままに、そのままに、硝子戸越しの外を見ると、柳の絮綿が・之を綿と呼ぶことは、奉天の

子供たちに聞いたので、枝垂柳の實が熟して、風のまにまに、或は、神のまにまに空に遊ぶので、遊ぶとも飛ぶとも形容し兼ねる軽い軽い様子で浮きて居るのである。羽化登仙などと云ふ詞は到底當らない。上つたり下つたり、流れたり飛んだり、散つたり聚つたり、行つたり來たり、唯遊んで居るのである。降りても集つても浮きて居るので、何の作意も無く喜戯する小兒の友にふさはしく、苦しみを知らず、悩み無き姿である。それを眺めて居る身も、おのづからそれに引き入れられて、何の障るものも無い。それは丁度、ミソギの行事果てし其の朝の境涯にでも比べようか。過ぎ來しことも忘れ、行くべき先をも思はず、今在る身をも知らぬ状態である。

此のやうな状態を、古老は○と教へた。無と呼ぶに等しいので、宇宙無きもので、未宇宙を成さざるもので、零と呼ぶ。それで、之を「隱身」と記し、「罔象女」と稱へて、「象ハ無キナリ」と教へられたのである。

けれども、「無いと云ふものは無い」と先師の教へられた如く、無宇宙とか○とか呼ぶのも、絶対の無とか頑空とか云ふのでないことは白すまでもない。

さて此の○なる境涯とは、全宇全宙牆壁無く障礙無き状態で、境涯無き境涯とでも云ふべきであるが、之は此のままに、千態萬様、モモヤホヨロヅミタマノカミ百八百萬魂神として、境涯を築き神徳を顯はしつづまします。之を、

○が○のままに産靈産魂たる神と稱へて、「天津神」にてましますのである。

柳の綿が、虚空に散つて、それがそのままに集り聚る。嵩は大きくなつても、そのままなる本の質を失はない。何處から來たのか、子供達は、何の樹から何う飛んで來たのかも知らぬながらに、柳の綿を拾つて居る。

ところが、間も無く、それを丸めて土の上に捨ててしまふ。捨てられた綿には、細かい細かい實が附いて居る。その實は、水と火と、日と月と、天と地との溫熱濕潤に包まれて、時経つままに芽が出る。その芽には、綿の姿

も實の様子も止めて居ない。一年二年三年五年十年と時は流れて、その時の子供も妙齡の美人と成つた。が、青と繁つた門の柳、五本の柳を、かつて自分が丸めて捨てた柳の綿の生へたのだと知るよしも無い。

青雲の、たなびく雲の、我が門の、五本柳。若柳の、いと面白く、立ち靡く、糸の結びて、今日もかも、繁り合ひたり。いや榮え、榮え行くべく、結び置きし、門の若柳、枝分かずこそ。

天津神の○は、何如に結び結びても○であるが、その○の結び成り成りて成り餘る身と、成り合はざる身との相偶ひ相交はるに到れば、天地の隔たりが遠くなり、天地を繋ぐ浮橋の天浮橋が失はれて滄溟と化してしまふ。すると、鹽土神の任運マニマニ、萬のものが生り出づるのである。生り成りて生り出でし身は、一定の範疇を築くので、それは既に元の如き○ではない。

此の範疇とは、先に述べたやうに、「ア」で、「畔」で、「吾」で、「足」で、「イノチ」である。

範疇としての「吾」は、もはや、○ではない身である。之を○と描き、或は、○とか○とか畫くことも出来る。此の「ミ」も、その本體としての○のままなる活用を彰はすならば、それは、天津神に等しき人天萬類であるからとて、國津神と稱へまつり祀り來つたのである。如斯き「吾」とは、發き發きて際無く限無き大宇大宙としての「ア」が、「ア」のままに結び結びたるに等しき「我」なりとの意で、讚辭ホメゴトバである。と云ふばかりでなく神輪の祕言なのである。

それで、「國津神」と稱へまつるは、神であつて物であつて、物でもあり神でもあるので、國津神大山祇と稱へては、土塊でもあり、水でもあり、火でもあり、草木でもあり、毛ケの和物ニゴモノでも毛ケの齷物アラモノでもある。其の女石長メスノ比賣・木花咲耶比咩と稱へては、國土の神・水火の神にてましますと共に、國土にてもあり水火にてもあるので

ある。

人が五官的に認めては、物であつて重濁の姿であるが、その物そのままの直日は清陽にして、天津日の光充ちたる神にて坐しますのである。直日としては、○に等しき身であるからとて○と稱ふるのである。

人天萬類が、此の○と成り此の○を顯はすには、「ヌサ」の「サバキ」に依りて、過去を被ひ、將來を被ひ、現在を被ふ。

過去は、一步一步と自分の踏んで來た道である。それを、時間的には、一分前一日前一月前二月前、また、一年二年十年二十年五十年前と回顧しつつ、空間的には、通つて來た境地を辿り辿つて、思ひ浮ぶかぎり、また、想ひ起し得ざる範圍でも、踏み來り通り來つたすべてを被ひ被つて、現在の人間身としての過去の一切を被ひつつ、母の胎内に在りしその時とその境とその身とに及ぶ。其處は、我が身としての「鏡之船」。

眞澄鏡・増鏡・増靈鏡・眞十鏡・増日鏡・眞經津鏡・天御鏡・鏡之船・上天下地・盡天盡地・唯一零界・大平等海。

大平等海裡に結び結び成り出でし身は、神魔剖割して一几に在るもの。斯くて、本來、此の身の○なることを知るのである。

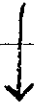
母の胎内にまで被ひ被へども、未其の來るところを明らめ得ないならば、更に、其の前に前にと遡る。父母の父母の父母の父母のと遡りて、人間身天降の境と時とその身とに及ぶ。すると、それは、劫火洞然奇振嶽の巔で、白玉光である。

白玉光底に潺湲たるの泉は、之我が祖國で祖神で、悠久の昔である。

2020.2.11.(火)

幸/94

本体(大裏観) ミナカヌシ



現象(大表観) アマ

 アマノミナカヌシ
 即. 又サ

このアマを本体とすれば、



ミヅは現象(本体がそのままに表現されたもの)

→ よって、宇宙の側における、ヒフミヨイの③としてのミヅは、

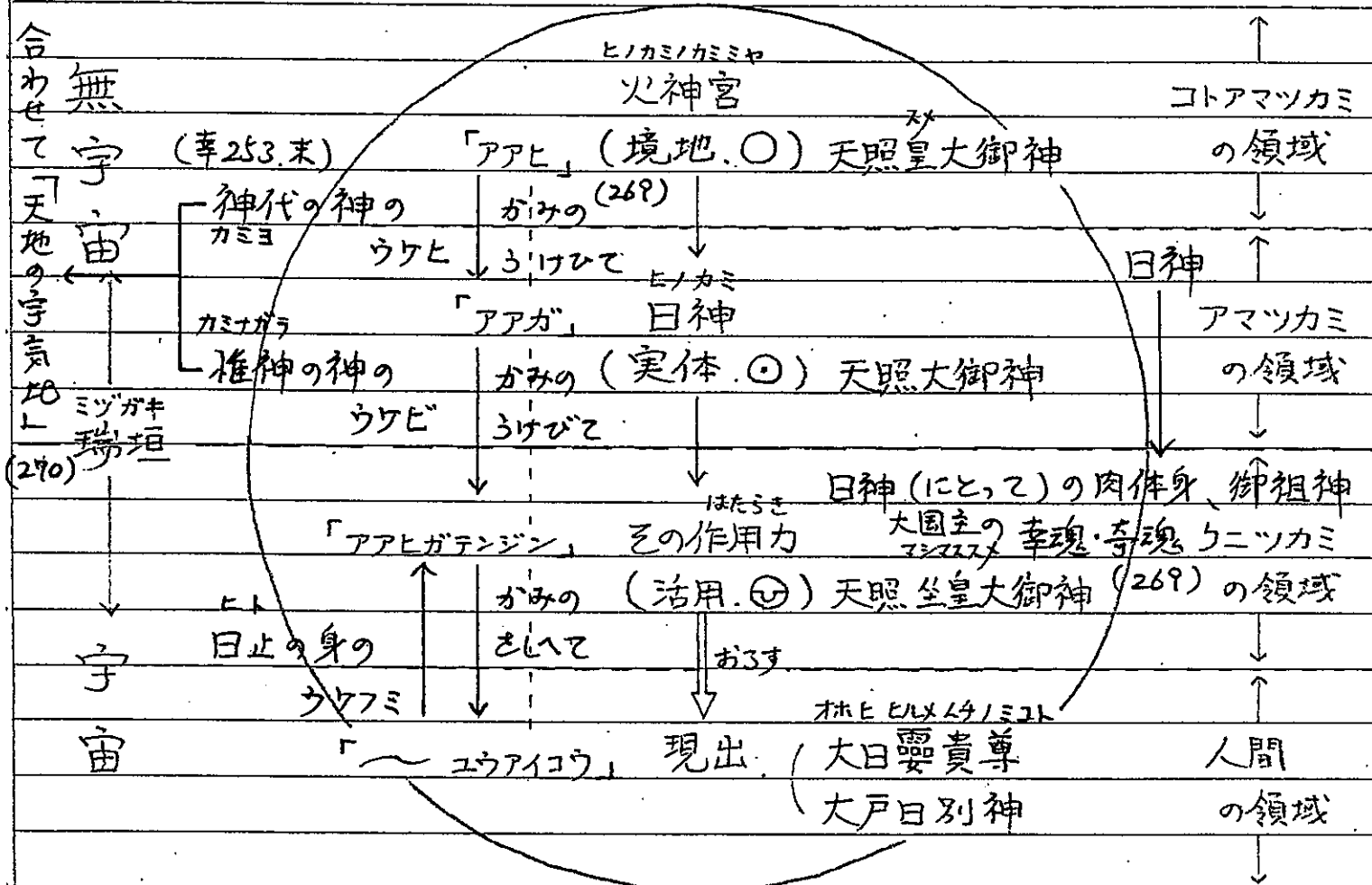
又サという本体からの表現であると解釈することができる。

故に、ミヅの代わりに、その本体である又サを用いることが

可能である。

十四字秘言と大宇宙概念図

ヒノカミ　はたふぎ



二〇 記伝に「本膚とは、見吹拆たるが差合のみならず、皮も毛も本の如くに成を云なり。」とあるのは誤りであつて、風に吹き離かれた皮膚が癒えるのである。即ち以前の皮膚のように、きつと癒えるであらうの意。書紀の一書に「大己貴命与少彦名命、戮力一心、經當天下。復為顯見蒼生及蒼生、則定其療病之方。」とある。

二 記伝に「此菟の白なりしことは、上文に言ずして、此処にしも俄に素菟と云るは、いささか心得ぬ書ざまなり。故思に、素はもしくは裸の義には非じか。若然もあらば、志呂とは訓まじく、異訓ありなむ。人猶考へてよ。」とある。三 者の字は助字で意味はない。「昔者」「頃者」などの「者」と同じ。

三 袋をかついで賤しい風をしているけれども、

四 「原袋」第十に「兎とワニ」の話を載せている。その前半は「因幡記ヲミレバ、カノ國ニ高草ノコヲリアリ。ソノ名ニニノ釈アリ。一ニハ竹草ノ郡ナリ。コノ所ニモト竹林アリケリ。其ノ故ヘニカク云ヘリ。其ノ竹ノ事ヲアカスニ、昔コノ竹ノ中ニ老タル兎スミケリ。アルトキニハカニ洪水イデキテ、ソノ竹ハラ水ニナリヌ。浪アラヒテ竹ノ根ヲホリケレバ、皆ナクツレソンジケルニ、ウサギ竹ノ根ニノリテナガレケル程ニ、オキノシマニツキヌ。水カサヲチテ後チ、本所ニカヘラント思ヘドモ、ワタルベキチカラナシ。其ノ時キ水ノ中ニワニト云フ魚アリケリ。コノ兎、ワニニイフヤウ、」となつており、以下は大体古事記と同様である。

三 前文との接続が少し唐突であるが、八十神や大穴牟遲神の求婚のことを省略したのであらう。

2 八十神の迫害

へてむ。故、汝は其の族の在りの隨に、悉に率て來て、此の島より氣多の前まで、皆列み伏し度れ。爾に吾其の上を蹈みて、走りつつ讀み度らむ。是に吾が族と孰れか多きを知らむ。」といひき。如此言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時、吾其の上を蹈みて、讀み度り來て、今地に下りむとせし時、吾云ひしく、

『汝は我に欺かえつ。』と言ひ竟はる即ち、最端に伏せりし和邇、我を捕へて悉に我が衣服を剥ぎき。此れに因りて泣き患ひしかば、先に行きし八十神の命以ちて、『海鹽を浴み、風に當りて伏せれ。』と誨へ告りき。故、教の如く爲しかば、我が身悉に傷はえつ。』とまをしき。是に大穴牟遲神、其の菟に教へ告り

たまひしく、『今急かに此の水門に往き、水を以ちて汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黃を取りて、敷き散らして、其の上に輾轉べば、汝が身本の膚の如、必ず差えむ。』とのりたまひき。故、教の如爲しに、其の身本の如くになりき。

此れ稻羽の素菟なり。今者に菟神と謂ふ。故、其の菟、大穴牟遲神に白ししく、

「此の八十神は、必ず八上比賣を得じ。帛を負へども、汝命獲たまはむ。」とまをしき。

是に八上比賣、八十神に答へて言ひしく、『吾は汝等の言は聞かじ。大穴牟遲神に嫁はむ。』といひき。故爾に八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむと共に議

多田公遺稿

津金木で、始終の無き始終で、
非で、否で、非否で、靈(び)
で、魂(び)で、産靈(むすひ)
で、産魂(むすび)で、高皇産
靈で、神皇産靈で、生魂で、足
魂で、玉留魂で、高魂で、神魂
で、生玉で、足玉で、玉留玉で、
道反玉で、死反玉である。

マタニハシタマハク
タガマノハラニシラス

庭之德。亦當御於吾兒。」

「齋庭之穂」とは「マツリノ
二ハ」の「イナボ」であるから
極大極小の零（ひ）を結び結び
て宇宙を築き、宇宙を統治すべ
きなりとの義である。

之れを「又ノ三ノ」ト

「ヒメカミフザ」とも称するの
で、「イナシコメシコメキ」で
醗女で、醗の又醗の醗の極であ

齋庭秘言一區。

歸。一。發。三。三。下。三。

眼耳鼻舌一空。

隨緣起滅一大命。

ひふみよいびなやいのたう

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ।

தெரிந்த தெரிந்த.

۱

0.51, 0.72

「稲羽素菟」とは、「イナバ」なる正しき資料にして、「シロウサギ」とは「ウサギ」にして極小の結びたる身なりとの義なるなり。

極小の結びたる身なりと云ふ

なまきりてこころをうけしむ

之れを「カミナガラ」とたた

て、
一、
方、
△、
一、
な、
る。

[illegible]

03

以上

一九三三年七月三日

「ヒ」の意味とその表現について

零^ヒ—— 時空や万物を構成する根本資料としての「實在」そのものを指す名称。

日^ヒ—— その「實在」が「中心」として機能している際の名称。「統一体」全体を指す場合もある。

↓極、唯一点、種子^{タネ}、、光^{ヒカリ}、日神^{ヒノカミ}とも。

火^ヒ—— その「實在」が単なる「資料」としてしか機能していない状態の名称。

「中心」に付随してその「外郭」を構成するか、さもなくば遊離して「魔^{マガツビ}」となる。

イナボ——「種子」と同義。極大極小の零（ヒ）のことを「種子」とも言い、「斎庭之穂」（マツリノニハの

イナボ）とも表現する。

イナバー正しき資料のこと。

万物は「中心」より出でて「中心」に帰る。その「中心」を「ヒ」と呼ぶが、同時に、その出たり帰ったりする際の「一貫した筋道」をも「ヒ」と称する。

人間にこの「ヒ」を教えるが、振魂尊こと天照大御神の御神徳である。

(ヒ) ^{ヒカミ} 日神 (極、極大極小、ウ)

無宇宙

(ヒカリ) ^{ナホヒ} 直日 (日神の神輪) = ^{カミ} 神
(最大最小)

宇宙

(極小の結びたる身、ウト)
^{ナホヒ} 直日の (そのままの) ^{ヒト} 人 = ^{カミ} 神人 (名詞)

→ これは「神律に正しく随^{したが}った人」とも

表現でき子ので、修飾語としては、

その「神律に随^{したが}ってこれをす^こう様」を

指^さして、^{カミ} 神へ、と言う。(未235頁)

(ウト、神聖、神人、カミ、はほぼ同義語)

第七節

「零が結び結んで」とか、「火が燃えに燃えて」とか、「日が照りに照つて」とか、又は、「一が積り積つて」とか、色色に説明は別でも、結局、それは、「稜威の魂」の「産靈産魂」であり、その完成された暁を、「日少宮」と讃へ、神数観の上では、第三十六神界と称して、天津神の神座である。カミクラ

それを、日本古典は、伊邪那岐命が、伊邪那美命に、事戸を渡し、阿波岐原に禊された結果として伝えられたのである。之は、神代の神の御上であるが、人間身として見れば、此の身を清く明くして、此の身此のままに、神の身と成り得たのである。此の身此のままの神の身を築き成せば、それは則、天皇国の大御宝たる実を顕し得たので、人としての仕事は、此処に完成されたのである。

「天皇の稜威の中の我である事実を完全に顕現する」。

それは、平生無事の時には、氣も付かぬ人が多いのであるが、非常時局に際会すると、外からの刺戟と、内からの覚醒とで、「大君の稜威の身」であることを悟つて、全身心を捧げまつる勇者と成るのである。

マストラヲノ、トルヤ。タマホコ。タママキテ。コヲロコヲロニ。ヒトムスブナレ。

よしや今。神の恵みの、厚からぬこともやあると、迷ふとも。また来る日をば、心して。いざ励まなむ。
人の世の道。

励み、励まし、相率いて、相互に、「大君の稜威の身」として、神国淨地を築く、
そのやうにして、その国の成り成る時、その人の生り出でし時、それを讃へて、「加牟^{カム}」と呼ぶ。それは、日
神の三田の賜物であり、三不可分の一である。三柱御祖神の神挂りであるとの意である。さうして、その神界が
完成した時、それを、数としては、「三十六」だと云ふ。それは、累積し尽した大数だからなので、「一二三四五
六七八九十」としての満数が、「ヒト」で、日止とも、火人とも、また、人とも書かれるのに対し、三不可分の
一たる三重の一、即、「ミイツ」を単位としての十は、神数としての三十六なのである、と云ふと、三の十倍な
らば三十であらうと反問されるかと思ふ。

三の十倍は慥に三十で、此の三十なる「カミ」は、古典が、別天神とも、无方とも、陰陽不則とも伝へたと
ころ。之を、人間的の位置からは、仮に、三十神界と称するのである。之は、古典に所云「天地初発」で、「神
界は未完成」である。それを、古典は、「水に浮べる脂の如くである」と記された。此の三十神界を制御し主宰
する二柱御祖神のましまして、はじめて、宇宙は完成するのである。それで、古典は、「天地初発之時、於高天
原成神名、天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並独神成坐而、隱身也。」「次国稚如浮
脂而、久羅下那洲多陀用幣疏之時、如葦牙因萌騰之物而、成神名、宇麻志阿斯訶備比古遲神。次天之常立神。此
二柱神亦独神成坐而、隱身也。」とて、宇宙構成の次序を教へられたのである。

その初は、天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神と仰ぐ三柱の十^{カミ}である。之を、別の詞では、生産靈・足

へては、「シ」である。それは三十六で結ばれた神界が、破壊されながらも、やがてまた結び来たるべき種子なのである。此の種子が有るので、人天万類は、生死関頭を縦走横馳しつつも、安心立命し得るのである。

日本天皇の古典は、之を「穂」^{イナボ}の伝として教へ来られた。その「イナボ」は、いとも醜く穢き物を摂り集めて、そこに、天津日の御光を仰ぎまつれば、不思議にも、その醜惡汚穢のものが變じて、善を尽し美を極めたる資材として、人の身を養ひ、神の心を和らげ、万有の命と成るのである。此の事理を、天照大御神には、天孫降臨の勅としてお授けになられた。それを、日本書紀には、「天照大神勅曰。以吾高天原所御齋庭之穂。亦当御於吾兒。」と記してある。

之を翻譯すると、「此の穂は、神から人に、親から子に、次ぎ次ぎに際限無く継続して、醜きものを陽く美しく、悪しきものを善く正しく、濁れるものを清く精しく、養ひ育てて、神の代の高天原に、神と成らしむる種子であり、瑞宝である。」となる。

之は、齋庭の秘事で、宇宙成壊の事理を教へ諭されたのである。その齋庭とは、神齋る祭りの庭である。それは、神の御位置から神を齋る神事との義で、それが則、「穂」の行事である。「庭」とあるから単に客観的の場所とのみ思ひ誤るかも知れぬ。けれどもその「庭」には、庭の主観が有り、また、主客合観が有る。場所として客観しただけでは、物であるが、その物は、何如なる物でも、必、存在すると共に活動して居るので、そこに主観が有る。それは則、心である。物であると共に心である。其の「物であり心である」ものを合せて観れば、中樞で、「神」と呼ばるるのである。此の神が、神ながらに、別れては会ひ、遭ひてはまた別れ、往きては返り、来ては去る。それを「ユニハ」と呼ぶ。その「ユ」は、從であり、湯である。「天ヨリ地ヨリ。彼ヨリ此ヨリ。

火ヨリ水ヨリ。乾ヨリ湿ヨリ。雌ヨリ雄ヨリ。陰ヨリ陽ヨリ。」等の「ヨリ」で、其の妙用は「湯」で、人としての位置から云へば、「日に新に、日に日に新に、又日に新」なのである。「二」は、煮で、似で、熟で、和で、仁で、二で、相寄り相助けて、神界樂土を完成するの義である。「ハ」とは、葉で分派分出で、子女たる芽である。出でて窮まらず、流れて尽きざるものである。此のやうな「ユニハ」とは、神子産出の胎で、神人長養の資材であり、やがて又是「神」である。之を「ミトシスメカミ」と畏みまつるのは、創造建設の神徳を讃美しての御名で、天真名井の「ミモヒ」たる水神^{ミヅノカミ}にてまします。此の氷神を、裏から拝みまつれば、破壊を司る第三十七神界の主である。が、日本の古典には、その教へが無い。支那には、之を「坎」と伝へ、禹の治水と表裏して、破壊と建設との分岐点を明示してある。

破壊の水を「坎」と教へたのは、科^{アチ}の義で、包犧氏が☵と描いて、二陰が一陽を姦するもので、人間世界の終末を指示したので、人と禽獸虫魚との區別は、唯此の一線の境に依るものであることを知らしめたのである。

「唯此の一線」「線無きの線」。之を「黄泉比良坂」^{ヨモツヒラサカ}なりとは、復活の面より教へたる日本古典の神伝である。

此の一線を境として神界成壞の秘事が行はれる。その数理は、固より秘数であるから、細説を憚るが、その数字の一端を並べて置かうならば、先、零。次ぎは一。それから三十六・三十七。四十四・四十九・五十。その次ぎは五十有五で、天地の数だと伝へてある。之は、祖神の教へ給へるに依りて、包犧氏が伝承したのである。

ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章 終

第八章 少彦の協力^{マガツビノカミ}

「一にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理観で宇宙観で、また、人身観だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。

日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂^{タカミムスヒ}の神の御子^{ミコ}に暴悪で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遲神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとすれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を醸して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を

毒を薬に変わることは、所謂「毒を以て毒を制する」のではなく、「毒を変じて薬と為す」ものである。それならば、どうして「毒が薬に変わる」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のまま分量と時間と空間とに適應させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用に依つて醜を美に惡を善に邪を正に轉換させるので、用の方とか使ひ場所とか使用の時とかに關はるのではない。「神音を稱^{タテ}へ神象を画^エき神数を算^スむ」。すると、禍津^{マガツミ}昆^ビと呼ぶところの醜惡邪曲が極底最下の火と化して根堅^{ネノカタスベクニ}洲國を築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に稱へる秘詞とは神音であり、行事中に画^{カク}するは神象であり、斎部の算^スむは神数である。さうしてその全部が行はれれば、瀬織津比咩・速開都比咩・氣吹戸主・速佐須良比咩の神座^{カミクラ}が成立する。それは則、日若宮^{ヒノワカミヤ}で、日隅宮^{ヒスミノミヤ}で、^{ヒカリ}◎である。

かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらずるの点線面なればとて之を画いて「と」となし之れを算^スんで「イ」となし之れを詠^{ウタ}ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出没浮沈三惡道。願望一夕冢間煙。

立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

